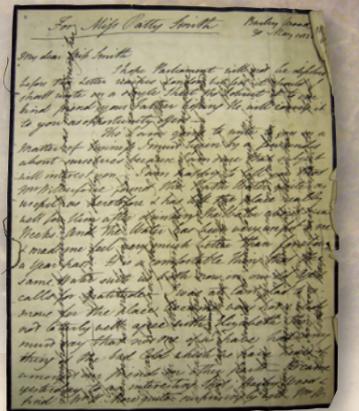
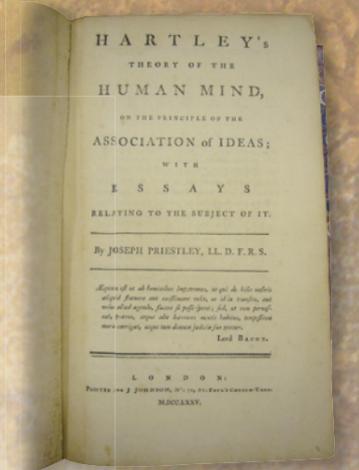


名古屋大学附属図書館 2008年秋季特別展

西洋近代思想と永井文庫

最大多数の最大幸福を求めて



名古屋大学附属図書館2008年秋季特別展

西洋近代思想と永井文庫

— 最大多数の最大幸福を求めて —

発行日 2008年●月●日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL: 052-789-3667 FAX: 052-789-3693

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館

ISBN 978-4-903893-04-4

2008年10月6日月 ~ 10月27日月

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

2008年秋季特別展開催にあたって

名古屋大学附属図書館及び附属図書館研究開発室では、ハイブリッド図書館構築の一環として、附属図書館所蔵資料を中心に、関連資料も含めた調査、研究を進めるとともに、学内外の連携のもと、特別展や企画展を通じてその成果を公開して参りました。

今回の2008年秋季特別展では、「西洋近代思想と永井文庫―最大多数の最大幸福を求めて―」と題し、永井義雄・本学名誉教授より附属図書館に寄贈されました貴重な洋書類を中心に初公開いたします。永井先生は、近代思想史、近代イギリス社会思想史のご研究で顕著な業績をあげられています。このたび、そのご研究に関わって形成されました蔵書を一括して寄贈され、その中でも特に貴重な600余冊は、附属図書館の貴重書「永井文庫」として収蔵させていただくことになりました。

文庫の内容構成は周到かつ広範で、その全容を示すことは容易ではありません。今から200年ほど前、日本では徳川幕府の支配が続き、中国を中心とした東アジア世界は「安定しているが発展がみられない」ともいわれていた頃、イギリスでは、近代的な政治や社会の幕開けを告げる新しい思想が続々と誕生していました。今回は特に、ベンサムやオウエンなど、その時代を代表する思想家たちや、フランス革命、議会改革、奴隷制、宗教のあり方など、当時の論争の的となったテーマを中心に、永井文庫の豊かな世界の一端をご紹介します。「最大多数の最大幸福」を求めた人々の、貪欲なまでの知的営為を示す貴重な書物の数々をご堪能いただけましたら幸いです。

最後になりましたが、今回の秋季展準備にあたりご助力をいただきました名古屋大学経済学研究科、およびご後援をいただきました社会思想史学会、日本18世紀学会、日本イギリス哲学会、そして、愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市の各教育委員会をはじめ、特別展開催にご協力くださいました関係機関、関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

2008年10月 名古屋大学附属図書館長
同研究開発室長
教授 伊藤 義人

展示会趣意

永井義雄本学名誉教授はわが国の近代イギリス政治社会思想史の代表的な研究者として知られている。とくに18世紀末イギリスの急進主義の研究、ジェレミー・ベンサムを中心とした功利主義研究では、独自の視点から重厚な研究書数冊を含む大きな業績を挙げられてきた。また近年では功利主義 Utilitarianism の公共的性格を強調し、「公益主義」として捉えなおす重要な問題提起を行い、自ら日本公益（功利）主義学会の組織者として活躍されるなど、広い視野からイギリス近代政治社会思想の現代的意義を問い直す活動を行われている。

このたび本館は氏のご好意により、貴重な個人文庫の寄贈を受けた。このコレクションは今後の研究で活用できる貴重な文献を多く含んでいるのみならず、永井名誉教授が研究で利用されてこられた中心的な資料でもあり、その点で氏の研究を概観するのに最もふさわしい。本展示会はこれを受けて、その内容を紹介しつつ、永井名誉教授の研究業績をたどり、それによって現在のわが国のイギリス近代政治社会思想史研究の展望を与えることを目的とする。

本コレクションは研究の現場を支える資料集として構想・収集されてきており、近代イギリス社会政治思想史の第一人者である所蔵者の研究の全体と方法を、以下の点で明確に示していると考えられる。

本コレクションは「近代意識」を典型的に示している18世紀末イギリスの急進改革主義と19世紀イギリスの功利主義を主な関心としつつ、近代イギリスの改革思想を歴史の文脈に密着して緻密にとらえていこうとしている点に顕著な特徴がある。このようなコレクションのあり方は、それぞれの時代の重要な著者の主著を解釈して思想の発展史を構成する思想史から、思想が生まれた現場を細部にわたって歴史的に検証し、その中で思想の動きをとらえようとする思想史記述への転換を示している。この点で本コレクションは、氏独自の思想史的展望とともに、「文脈主義」や「政治言説史」などの方法論的主張に典型的に見られる、近年の思想史研究の展開をよく表現しているといえる。

第二に、本コレクションは以上のような思想史の構想に基づき、群小の著者、作品を重視して収集されている。その中には匿名、著者不明の作品も多い。本コレクションは資料論的にも、思想の展開を歴史的現実の細部に即して観察するため、忘れられた著者やパンフレットやマニュスクリプトを重視してきた思想史研究の方向性をよく示している。

第三に内容の点から見ると、コレクションの主眼は、功利主義を大きな柱としつつ、18世紀後半の急進主義、18世紀末から19世紀初頭のフランス革命をめぐる急進派とそれに対する保守主義の台頭、19世紀前半の自由主義と社会主義およびそれに対する対応を、論争や歴史的事件の影響を見ながら克明に跡付けていくところにある。その点で、集められた資料の内容の点でも、歴史の具体的な変動と論争の場の中で思想をとらえる方法論が一貫して貫かれている。本コレクションは以上の点で、本館所蔵の近代思想史コレクションの学問的な延長と展開として位置づけることができる重要な資料集成である。

本展示会は以上のような永井文庫の際立った個性を浮き彫りにする。これを通じて、近代史、近代思想史に関心をもたれる方々が、近代イギリス思想史、イギリス史の実相を広く理解していただければ幸いである。

Professor Yoshio Nagai

I have known Professor Yoshio Nagai, the leading Japanese scholar on the life and work of Jeremy Bentham, for so long that I cannot recall when we first met. It must have been in the 1970s (or perhaps earlier) that our paths began to cross, as both of us pursued the lonely roads through the complexities of Bentham's thought and the voluminous collections of manuscripts at University College London, the British Library, and elsewhere. His two books on Bentham are part of the fruit of these decades of research. Although I have been unable to read them (due to my inability to read Japanese) I have heard his papers in English and shared many interesting conversations about Bentham and on other topics. These have revealed a serious, independent, enquiring, and original mind with much creativity in his outlook and approach.

When I became General Editor of the Collected Works of Jeremy Bentham in 1983, Professor Nagai and I could cooperate more fully to bring the new Bentham research from the Collected Works other new developments in utilitarianism more generally to Japan. This enterprise culminated in the highly successful fourth major conference of the International Society for Utilitarian Studies, which was held in Tokyo in August 1994, with Professor Nagai as the main organizer and ably supported by Professors Otonashi and Hijikata of Chuo University. From this conference numerous other meetings followed, including those sponsored by the Japanese Society for Utilitarian Studies, which was founded by Professor Nagai. He has encouraged the study of Bentham and utilitarianism in Japan which, now sufficiently established in two academic generations, will continue in the future.

When I visited his house in Nagoya, I was privileged to see the grand library that he had established, full of numerous important works in Japanese, English, French and other languages. Particularly fascinating for me was his collection of rare early translations of Dumont's versions of Bentham's writings, published at the beginning of the modern Japanese state.

In recent years Professor Nagai has sent me several CDs of the Nagoya Symphony Orchestra in which he has played the cello. The orchestra as a whole plays very well and I have enjoyed the performances of mainly Western classics. The choice of the cello suits a passionate personality with a love of beauty. That is how I see Professor Nagai's personality which has guided his considerable scholarship over many years.

Congratulations on this important occasion.

Frederick Rosen
Professor Emeritus of the History of Political Thought
Honorary Senior Research Fellow, the Bentham Project
University College London

目 次

ご挨拶

展示会趣意

Frederick Rosen, “Professor Yoshio Nagai”	4
はじめに	5
I. バーミンガムからの眼差し	7
II. フランス革命から「帝国」の再編へ	11
III. 教会と統治	25
コラム：2つの革命の時代：18世紀後半から19世紀前半の イギリス	34
IV. ベンサムとオウエン	35
コラム：ベンサム、哲学的急進派、功利性の原理	39
V. 「知」と実社会をめぐる諸相	41
VI. 永井義雄の世界	52
永井文庫希少本リスト	54
参考文献	57

はじめに

永井義雄名古屋大学名誉教授は、1931年11月25日、愛知県に生まれ、54年3月名古屋大学経済学部卒業、56年3月同大学院経済学研究科修士課程修了、59年3月同博士課程単位取得退学後、同年7月名古屋大学助手をはじめに、61年7月より名古屋市立女子短期大学講師（63年同助教授）、65年9月金沢大学助教授（76年1月同教授）、81年4月名古屋大学教授（ただし83年4月より84年3月まで金沢大学教授として名古屋大学教授に併任）、90年4月一橋大学教授、95年4月関東学院大学教授に就任し、97年3月の定年退職に至るまで研究教育職を歴任されました。名古屋大学では、経済学部教授として、社会思想史と経済学史を担当され、94年に名古屋大学名誉教授を授与されました。

1962年5月に最初の著作『イギリス急進主義の研究—空想的社会主義の成立』を公刊され、これにより翌63年2月に名古屋大学経済学博士の学位を取得されました。以後、この本で対象とされた「自然法思想から功利主義の転換という興味あるかつ重大な思想的現象が生じた時期」を中核とし、近代思想史研究において、思想の新解釈、対象の発掘拡大、方法論の検証に至るまで、幅広くかつ深い研究を、地道に休むことなく精力的に展開され、多くの問題提起と今日研究者の共有財産となる成果とをもたらされました。その研究射程は大きく、イギリス近代思想史にとどまらず、ヨーロッパ大陸の思想史、日本近代思想史、アジア近代化論にまで及んでおります。

とりわけ、プライス、プリーストリーなどの「小市民的急進主義」、ロバート・オウエン、ベンサムと功利主義、マルサスとその周辺について、それぞれ永井説ともいうべき、重要かつ斬新な思想史的解釈を提出し、思想史研究者を刺激し続けておられます。『ロバート・オーエン試論集』（74年3月）、『ベンサム』（83年7月）はその記念碑的著作であり、オウエンについて、それまで「プロレタリア思想家」とされていたのを否定し、功利主義思想の発展の線上でその統一的思想像を示し、ベンサムについて、ベンサム主義の核心としての「最大多数の最大幸福」の原理が立法の原理であり、立法者が特定の利益を全体の利益に優先させてはならないという自己規制原理であることを論証し、ベンサム体系＝利己主義というマルクス（主義）説を覆すなど、それぞれ画期的な業績とみなされております。さらに、『ロバート・オウエンと近代社会主義』（92年7月）と『イギリス近代社会思想史研究』（96年2月）には、永井思想史の全体像が示唆されていると申せましょう。

内外の学会活動においても、その貢献は、多大かつ多岐にわたっており、経済学史学会、社会思想史学会、日本18世紀学会、日本イギリス哲学会、ロバート・オウエン協会、マルサス学会などで幹事あるいは理事として思想史研究活動をリードし、Bentham Society（ベンサム学会）とThe International Society for Utilitarian Studies（国際功利主義学会）を舞台に研究の国際的展開を促し、特に後者においては、日本で94年8月に学会大会を主催し研究発展に尽くされました。さらに、『自由と調和を求めて—ベンサム時代の政治・経済思想』（2000年5月）、『ベンサム』（2003年4月）を出版するなど、精力的に研究を進められております。

永井思想史の強みの源泉には、徹底した原典資料の尊重があります。思想史研究に根強くあった対象のイデオロギー的評価の傾向を廃し、原典への沈潜に基づいて多くの通説を覆してこられました。そのため、多くの文献資料の発掘収集を個人の努力で行ってこられましたが、その貴重な文献の多数を集成して、今回、寄贈していただくことになりました。永井文庫は、イギリスを中心とした近代思想史文献集成として、永井思想史のみが発掘と収集を可能にした貴重な文献を多く含み、他では得難い独特な豊かさを備えたものとなりました。また、永井思想史の方法成立の現場、旧学問との戦いの足跡を伝えているという意味で、とりわけ若い世代の研究者にとって、魅力あふれるものとなっております。

名古屋大学経済学研究科 教授
安藤隆穂

I. バーミンガムからの眼差し

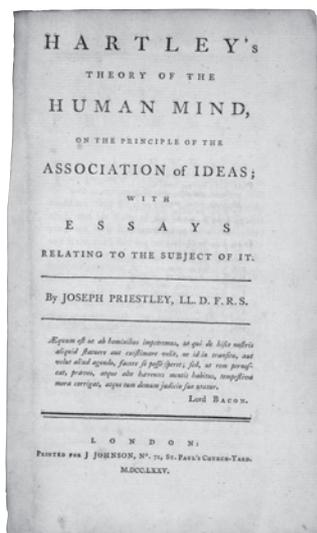
今日、「イギリス」、「英国」、「ブリテン」などさまざまに呼ばれている国が、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北部アイルランドからなる複合国家としての連合王国 United Kingdom であることはよく知られているだろう。永井文庫の特色の一つは、この連合王国のなかでもイングランドに対する徹底したこだわりにある。イングランド中西部の新興工業都市バーミンガムは1770年代前後から1830年代にかけて、「知」のダイナミズムの面でも政治的なメッセージの発信地としても、興味深い存在であり続けた。今日のわれわれに馴染みの深いさまざまな科学的知識や技術のうち、このバーミンガムを取り巻く知的環のなかから生まれ出たものは少なくない。ディセンター（非国教徒）の牧師ジョゼフ・プリーストリーは1772年に酸素を発見した。ジェームズ・ワット（James Watt, 1736-1819）が発明した蒸気機関は19世紀前半にかけて産業革命の進展に一役買った。いかにも英国趣味の陶器としてよく知られているウェッジウッドも、この時期のバーミンガムにおいてその土台を形作った。進化論で知られるチャールズ・ダーウインの祖父エラスマス・ダーウインも近年あらためて関心を呼びつつある。これらの人々は、満月の前後の月曜日に集まってさまざまな「知」を語る「ルナ・ソサイエティ」のメンバーであった。永井が積極的に検討を加えているプリーストリーは、観念連合理論で知られるデイヴィッド・ハートリー（David Hartley, 1705-57）の議論を継承し、また国教会の権威に抗して信仰の自由を強く求めた人物でもあった。

バーミンガムは、フランス革命の熱気が伝わる1791年には暴動の舞台となった。また、その後も、ナポレオン戦争の終結後の経済の停滞とそれに続く金本位制への復帰のなかでインフレーション政策を強く求めるトマス・アトウッド（Thomas Attwood, 1783-1859）らの運動が登場し、アトウッドらバーミンガム政治同盟に集うグループは議会改革のうねりにも一役買うことになる。

1) 請求番号33

デイヴィッド・ハートリー著、ジョゼフ・プリーストリー編『人間精神の理論』

David Hartley, *Hartley's Theory of the Human Mind, on the Principle of the Association of Ideas*, London, 1775.

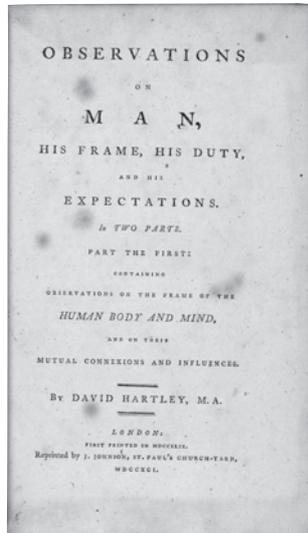


本書はプリーストリーが、ハートリーの『人間論』のうち観念連合理論に関する部分を中心に編集した上で序文を付して出版したもの。

2) 請求番号24

デイヴィッド・ハートリー『人間論』

David Hartley, *Observations on Man, his Frame, his Duty, and his Expectations, in Two Parts*, 3 vols, London, 1791.

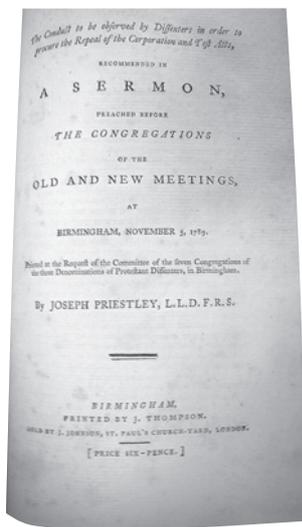


医師でもあったハートリーは生理学上の知見をもとに、身体と精神の相互関係を重視しながら、「振動の理論」と「連合の理論」に基づいて人間の精神現象を分析した。ロック以来の経験論の伝統の上に観念連合理論を大成させ、その理論はプリーストリーをはじめとして多くの支持者を見出し、また19世紀のジェイムズ・ミルら連合心理学派の先駆ともなった。『人間論』（初版1749年）は観念連合心理学の古典。

3) 請求番号32

ジョゼフ・プリーストリー『審査律論』

Joseph Priestley, *Tracts of the Test Acts*, London, 1789.



自らも非国教徒であったプリーストリーは宗教的自由を求めて、非国教徒の公職就任を禁止した審査律の廃止を求める運動に積極的に参加していた。

ジョゼフ・プリーストリー Joseph Priestley, 1733-1804

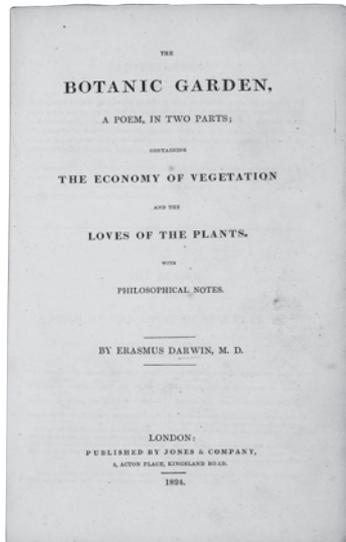
ヨークシャーに生まれた神学者、自然哲学者、政治思想家。キリストの神性と原罪を認めないソツツイーニ主義者であった。ハートリーにも触発され、唯物論と必然論を展開した。科学研究に精力的に取り組み、とりわけ酸素の発見者として知られている。教育と宗教の自由を説き、教育と宗教への国家介入を強く批判した。政治論においてはロックの自然権・社会契約論を受け継ぎつつ、ベンサムをはじめとして後代の思想家への影響も大きかった。人々の大多数の幸福を政治の唯一の目的とする功利性の原理から、財産権などの社会的権利および抵抗権を措定した。当時の政治

経済体制を基本的に承認していたが、1791年のバーミンガム暴動において保守的体制派群衆の敵意的になった。暴動後、アメリカに逃れ、当地で生涯を終えた。

4) 請求番号60

エラスマス・ダーウィン『植物の園』

Erasmus Darwin, *The Botanic Garden*, London, 1824.



エラスマス・ダーウィンは、リンネをイギリスに紹介した植物学者としても知られている著名な自然科学者であり、詩人としても有名であった。進化論の萌芽となる考えをもっており、1791年に初版が刊行された本詩集でも自然科学全般についてのアイデアが詩の形でしめされている。この書物には、酸素、水素およびプリーストリーに言及した脚注もある。

エラスマス・ダーウィン Erasmus Darwin, 1731-1802

イギリスの医師・思想家・詩人。孫であるチャールズ・ダーウィンが体系化することになる進化論の先駆者の一人であった。エディンバラ大学とケンブリッジ大学に学ぶ。ルナ・ソサイエティの創設メンバーでもあった。『植物の園』(*The Botanic Garden*, 1791)、『ズーノミア』(*Zoonomia*, 1794-96)、『自然の殿堂』(*The Temple of Nature*, 1803) などにおいて自然科学上のアイデアを詩の形で表現した。『ズーノミア』には、すべての動物は1個の生きたフィラメントから海中で生じたという見解が見られ、その考えは『自然の殿堂』でさらに明確にされている。宗教的には理神論者で、生物の変化への神意の介入を認めなかった。

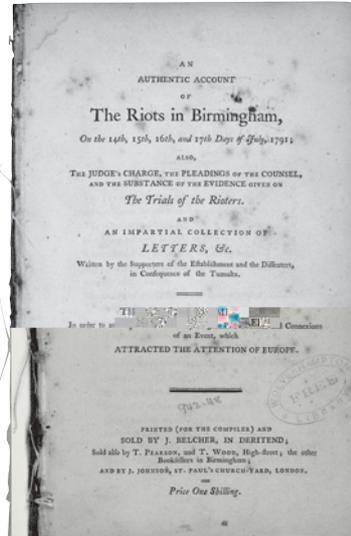
ルナ・ソサイエティ Lunar Society

毎月、満月に近い月曜日に会員の自宅で夕食をとりながら会合をもったのでルナ・ソサイエティと呼ばれる。記録が残っていないため、いつ形成されたかははっきりとしないが、1775年に正式にルナ・ソサイエティを名乗るようになり、1813年まで続いた。新興の工業都市であったバーミンガムで、産業に応用可能な科学に関心をもつ科学者、技術者、産業家、哲学者たちが有用な科学知識について意見交換をはかる場であった。マシュー・ボルトン (Matthew Boulton, 1728-1809)、ジョン・ホワイトハースト (John Whitehurst, 1713-1788)、エラスマス・ダーウィン、ジョゼフ・プリーストリー、ジェームズ・ワット、ジョサイア・ウェッジウッド (Josiah Wedgwood, 1730-1795) など、錚々たる人々が参加していた。ルナ・ソサイエティは18世紀後半に盛んになったイギリスの各種地方学会・協会のなかでも、マンチェスター文学・哲学協会と双璧をなすものであった。

5) 請求番号581

トマス・ウォーカー 『バーミンガム暴動についての真の説明』

Thomas Walker, *An Authentic Account of the Riots in Birmingham, on the 14th, 15th, 16th, and 17th days of July, 1791; also, the Judge's Charge, the Pleadings of the Counsel, and the Substance of the Evidence given on the Trials of the Rioters.... The whole compiled*, London, 1791.

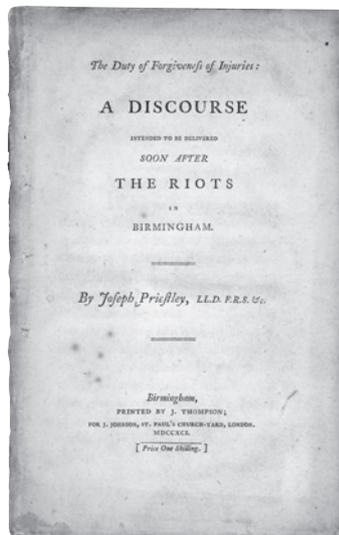


1791年7月にバーミンガムで、暴徒化した市民がフランス革命に好意的だった急進主義者や非国教徒を襲撃するという事件が起きた（バーミンガム暴動）。この暴動の際に主要な標的とされたプリーストリーは自宅を焼き払われた。本書はこのバーミンガム暴動の経緯やその裁判の記録を、暴動後にプリーストリーがやりとりした書簡などとともにまとめたもの。著者のトマス・ウォーカーはマンチェスターの非国教徒で急進的政治改革論者としても知られており、ジョン・カートライトが1780年に設立した国制情報協会のメンバーでもあった。

6) 請求番号27

ジョゼフ・プリーストリー 『被害を赦す義務』

Joseph Priestley, *The Duty of Forgiveness of Injuries: A Discourse Intended To be Delivered Soon after the Riots in Birmingham*, Birmingham, 1791.



プリーストリーは自身がバーミンガム暴動の最大の被害者の一人であり、暴動後にバーミンガムを離れることを余儀なくされたにもかかわらず、暴動に参加した群衆に恨みを向けることなく許しを与え、ともに苦難を乗り越えていくことを同胞に訴えた。

Ⅱ. フランス革命から「帝国」の再編へ

17世紀に二度の革命を通じて既に議会政治のスタイルを形作っていたイギリスではあったが、1789年のフランス革命の勃発は、イギリスにおいても人々の権利や統治機構のあり方をめぐって大きな論争を呼び起こした。フランス革命を批判し名誉革命以来のイギリスの統治機構の優越性を謳ったエドモンド・バークの『フランス革命の省察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790)に対して批判と反批判が沸き起こったのは、フランス革命勃発からまだ間もない時のことであった。1793年以降には、統治機構のあり方や人権をめぐる議論とならんで、イギリスがヨーロッパ大陸列強と協力してフランス革命に対して干渉を行うべきか否かが焦点の一つとなった。18世紀のイギリスは頻繁に戦争を行い、その戦費の負担によって赤字財政構造となっていたから、対仏干渉という外交問題はイギリスにとっては財政問題を抜きにして論じることのできないものであった。18世紀後半にあたってリチャード・プライスらが活発にこの問題を論じており、対仏干渉の時期にもニコラス・ヴァンシタートらの考察が続いた。

フランス革命期のイギリスはアイルランドの政治的急進化という問題にも直面していた。急進化の頂点としての1798年の反乱とその失敗を機に、イギリスとアイルランドとの連合へ突き進むことになる。永井文庫はこの連合をめぐるパンフレット合戦の様子を伝えている。

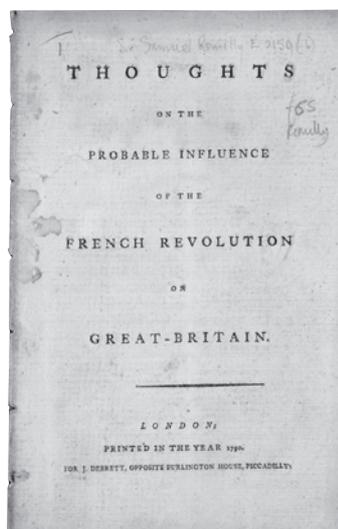
大西洋を舞台としたいわゆる三角貿易は、アフリカ大陸からカリブ海の島々へ、そしてアメリカ本土への奴隷貿易をその重要な一部としていたが、フランス革命はまた、この奴隷貿易のあり方を真剣に問い直す重要な契機ともなった。奴隷貿易・奴隷制に反対する運動はこの時期に急速に盛り上がっていったが、その主要人物の一人がウィリアム・ウィルバーフォースである。

1. イギリスにおけるフランス革命

7) 請求番号554

サミュエル・ロミリー『フランス革命がイギリスに与えるであろう影響について』

Samuel Romilly, *Thoughts on the Probable Influence of the French Revolution on Great-Britain*, London, 1790.



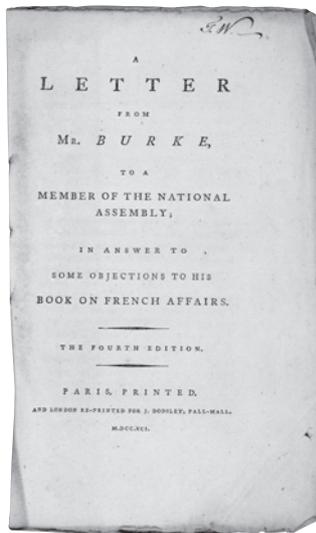
サミュエル・ロミリー Samuel Romilly, 1757-1818

法律家・政治家・刑法改革者。ロンドンのウェストミンスターに生まれ、1783年、法学院を出て弁護士になった。ルソーの考えに共鳴し、1786年に刑法の不合理を指摘する文章を発表して以来、刑法改革を志して法曹界で頭角を現し、1806年には下院議員となった。1810年には『イングランド刑法考』(*Observations on Criminal Law of England*, 1810)を著した。彼の思想は1820年代の刑法改正に大きな影響を与えた。

8) 請求番号468

エドマンド・バーク『バーク氏から国民議会議員への手紙』

Edmund Burke, *A Letter from Mr. Burke, to a Member of the National Assembly; in Answer to some Objections to his Book on French Affairs*, 4th ed., Paris, 1791.



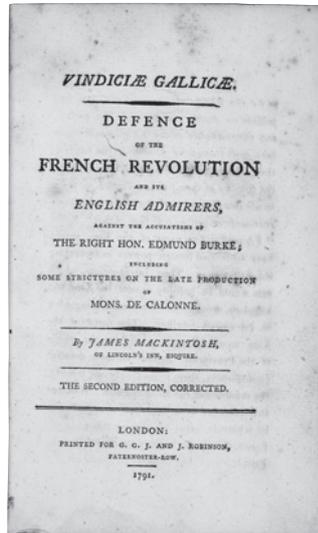
エドマンド・バーク Edmund Burke, 1729-1797

アイルランド、ダブリン生まれの政治家、政論家。理神論を諷刺した『自然社会の擁護』と美学論文『崇高と美の観念の起源』の成功によって文筆家としての名声を得る。1765年には下院議員に選出された。1770-80年代には、ジョージ三世統治下の官職授与などを通じた私党の形成に対する批判、アメリカ植民地擁護、経済改革などを主張し、自由の擁護者、穏健な改革者として活躍した。しかし、フランス革命に際して、革命に共鳴するイギリス国内の急進主義者を批判する『フランス革命の省察』を著した。

9) 請求番号258

ジェイムズ・マッキントッシュ『フランス革命の擁護』

James Mackintosh, *Vindiciae Gallicae. Defence of French Revolution and the English Admirers, ...* 2nd ed., corrected, London, 1791.



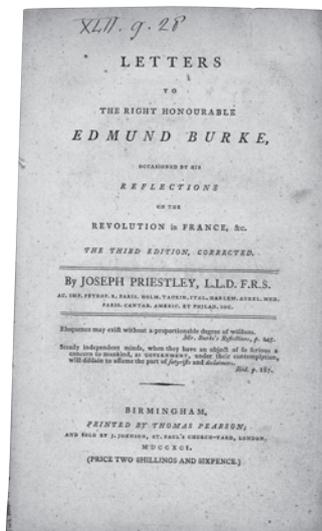
ジェイムズ・マッキントッシュ James Mackintosh, 1765-1832

スコットランドの政治家、政治評論家、歴史家。幼い頃からチャールズ・ジェイムズ・フォクスに憧れており、生涯を通じてウィッグ的立場を保持し続けた。エディンバラ大学で医学を学んだが、新婚旅行でフランスに赴いた際にフランス革命の進行を直接目撃し、政治評論家になることを決意する。1791年にバークの『フランス革命の省察』に反論してフランス革命を支持する『フランスの擁護』を著した。本書は、トマス・ペインの『人間の権利』と共に革命支持者に広く読まれた。1813年に下院議員に選出され、穏健的改革の立場から議会改革やカトリック解放などに寄与した。『エディンバラ・レビュー』にもたびたび寄稿した当時を代表する知識人でもあった。

10) 請求番号35

ジョゼフ・プリーストリー『バーク閣下への手紙』

Joseph Priestley, *Letters to the Right Honourable Edmund Burke, Occasioned by his Reflections on the Revolution in France*, 3rd ed., Birmingham, 1791.

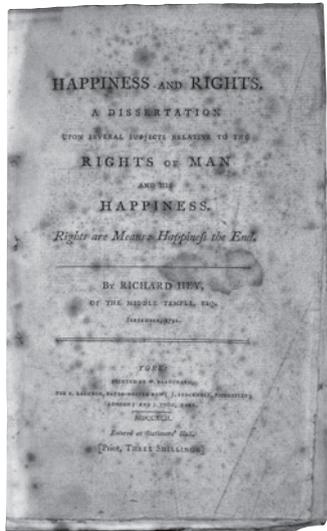


バーク『フランス革命の省察』に対する批判を十三の書簡の形式でまとめたもの。前半部分（第1-5書簡）では『省察』に対する全体的な批判を展開し、後半では、イングランドの国教会制度（教会と国家の一体化）を擁護したバークの議論に対して非国教徒の立場から批判を展開している。

11) 請求番号69

リチャード・ヘイ 『幸福と権利』

Richard Hey, *Happiness and Rights, A Dissertation upon Several Subjects Relative to the Rights of Man and his Happiness*, York, 1792.



リチャード・ヘイ Richard Hey, 1745-1835

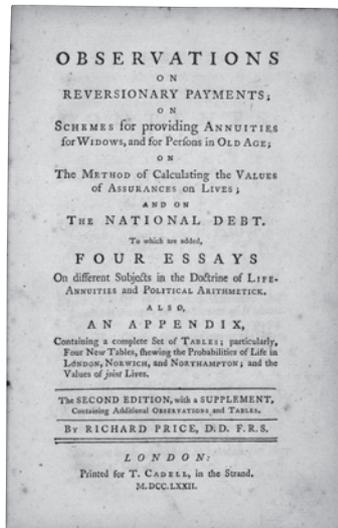
リーズ付近のパドシー生まれの評論家、数学者。1764年にケンブリッジ大学モードリン・カレッジへ入学し、1768年数学の優等卒業試験に3番の成績で合格し学士号を取得。1771年には修士号、1779年に法学博士号を授与される。『市民的自由の本質と統治の原理についての省察』（1776）のほか、『賭博の害悪について』（1783）、『決闘について』（1784）、『自殺について』（1785）など多くの著作を公刊した。1792年には、ペインの『人間の権利』に対する応答として『幸福と権利』（1792）を著した。

2. 財政問題の政治学

12) 請求番号52

リチャード・プライス『生存給付について』

Richard Price, *Observations on Reversionary Payments;....*, 2nd ed., With supplement, London, 1772. (初版は1771年)



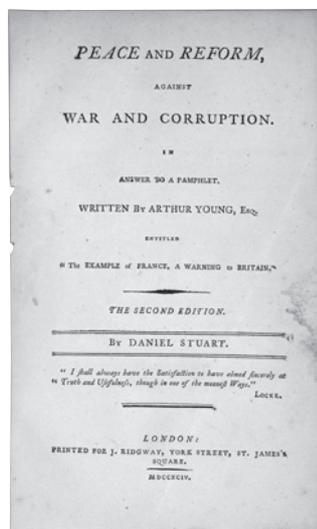
リチャード・プライス Richard Price, 1723-1791

アリウス主義の牧師・神学者、政治思想家。ロックを継承し自由を自己統治と捉えつつ、社会契約時における体制への同意というロックの限界を超えて、自己統治論を人民主権に基づく議会改革と国家主権へと一貫させた市民的自由論を展開した。アメリカ革命とフランス革命を支持する論陣を張り、とくに後者では、祖国の自由を発展させる改革を有徳の祖国愛として説いて、バークらと激しい論争を展開した。

13) 請求番号397

ダニエル・ステュアート『平和と改革』

Daniel Stuart, *Peace and Reform, Against War and Corruption....*, 2nd ed., London, 1794.



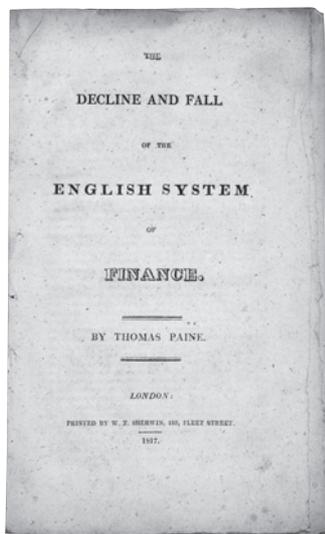
ダニエル・ステュアート Daniel Stuart, 1766-1846

エディンバラでジャコバン派の家系に生まれた。義兄にジェイムズ・マッキントッシュがいる。1788年までには『モーニング・ポスト』の出版者として頭角を現したが、1803年に病気のため同紙を売却した。1794年に『平和と改革』を書き、アーサー・ヤングを批判してフランス革命を擁護するとともにイギリスにおける議会改革を主張した。1796年には『モーニング・ポスト』にペインの論説「イングランド財政制度の衰亡」を連載したことで、『アンチ・ジャコバン』から厳しい批判を受けた。1800年ころに『クーリア』(The Courier)を購入した。『クーリア』は『モーニング・ポスト』とは対照的に、愛国主義・保守的であった。コールリッジは、ステュアートの反ジャコバン、反フランス、反ナポレオンの態度を評価し、同紙が大衆の支持を取り付けることでナポレオン打倒に貢献したと述べている。

14) 請求番号533

トマス・ペイン『イングランド財政制度の衰亡』

Thomas Paine, *Decline and Fall of English System of Finance*, London, 1817. (初版は1796年)



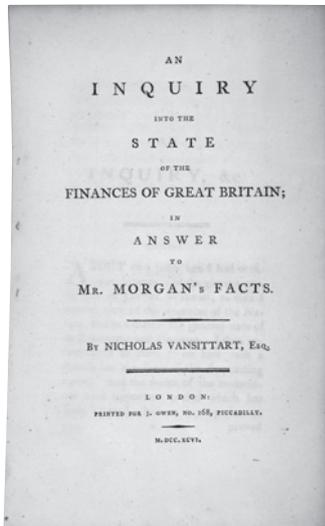
トマス・ペイン Thomas Paine, 1737-1809

セットフォード(ノーフォーク)生まれの政治著作家。1768年、物品税吏になる。1774年、ロンドンで知り合ったフランクリンに勧められフィラデルフィアに移住。1776年に出版されたアメリカ独立を擁護した『コモン・センス』は年内に56回版を重ねたと言われる。伝統的なイギリス国制擁護論を批判して、政府による統制の最小化と自己統治に基づく共和主義を構想した。帰英後の1791年に『人間の権利』を著し、バークの『フランス革命の省察』に反論してフランス革命を熱心に擁護した。過激な体制批判によってイギリスを追放されたが、フランスで市民権を得て国民公会議員に選出された。1793年にはルイ16世の処刑に反対したことなどから収監され、収監中に『人間の権利』新版と『理性の時代』第1部の執筆を開始した。1802年ジェファソンの招待で再びアメリカに赴くが、理神論を改めなかったこともあって友人たちにも見放され、不遇のうちに同地で没した。展示する書籍のタイトルは、1776年にその第1巻が刊行されたギボンの『ローマ帝国衰亡史』のタイトルを明白に踏まえている。

15) 請求番号578

ニコラス・ヴァンシタート『イギリス財政状況の研究』

Nicholas Vansittart, *An Inquiry into the State of Finances of Great Britain; in Answer to Mr. Morgan's Facts*, London, 1796.



ニコラス・ヴァンシタート Nicholas Vansittart, 1766-1851

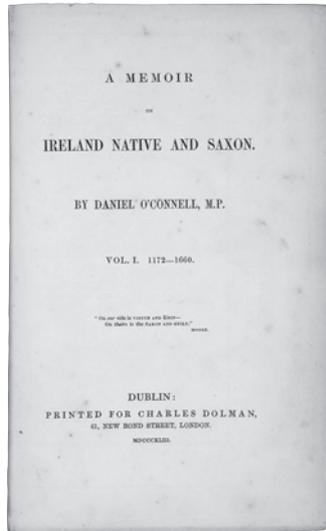
ミドルセックス、ブルームズベリー生まれの政治家。オックスフォード大学クライスト・チャーチで教育を受け、1787年に学士号取得。数多くのパンフレットを書き、実際のところ国家財政は戦争による打撃をそれほど受けなかったと主張して、ピット内閣の財政政策を支持した。1796年に下院議員となり、大蔵省共同書記官やアイルランド相を経て、1812年から23年まで大蔵大臣を務めた。11年間の大蔵大臣在任期間はイギリス史上最長である。1813年、負債償却積立金を導入し、1816年には所得税や財産税の軽減を提案した。彼の財政システムはハスキソンやリカードなどから厳しく批判された。

3. アイルランドとの連合

16) 請求番号47

ダニエル・オCONNELL『アイルランド人およびサクソン系にとってのアイルランドについて』

Daniel O'Connell, *A Memoir on Ireland Native and Saxon, V. 1: 1172-1660*, Dublin, 1843.



ダニエル・オCONNELL Daniel O'Connell, 1775-1847

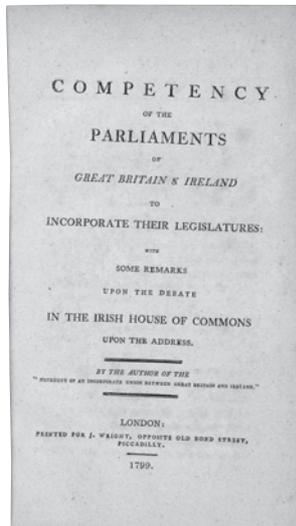
アイルランド、カーシビーンでカトリックの家庭に生まれた。1798年アイルランドで法廷弁護士となる。流血や殺人をもたらす反乱に批判的で、反乱より法による改革を追及した。カトリック教徒に不利なイギリス法の廃止を求めて1823年カトリック協会を設立。1829年下院議員に当選し、カトリック解放法の成立に尽力した。議会ではしばしばウィッグと協調し、反カトリックのピールと対立した。1841年にはカトリック初のダブリン市長となった。1843年クロンターフで演説した後に逮捕され、翌年初めに煽動的共謀罪で有罪宣告を受け、また、飢饉がアイルランドを襲った1845年頃から、自らが設立した青年アイルランド党 (the Young Ireland) のメンバーが、彼が反対していた暴力的抵抗を含んだ革命的教義を主張し始めるようになるなど、晩年は不遇であった。

イングランドとアイルランドの連合をめぐる匿名パンフレット群：

17) 請求番号184

『議会の適格性』

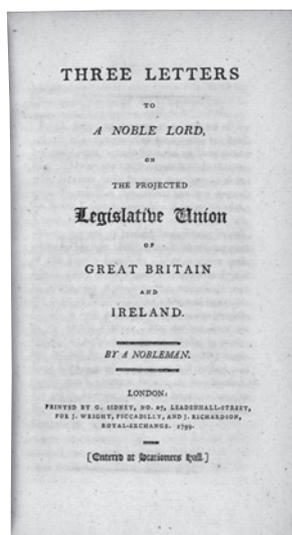
Anon., *Competency of the Parliament*, London, 1799. (匿名)



18) 請求番号189

『イギリスとアイルランドの間で企画されている立法上の連合についてのある貴族への手紙』

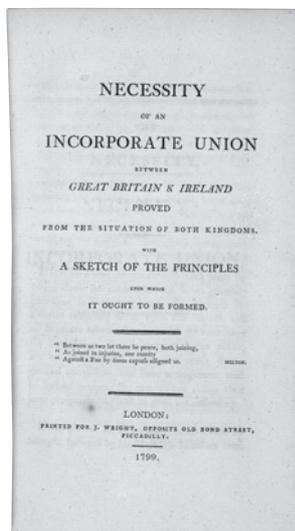
Anon., *Three Letters to a Noble Lord, on the Projected Legislative Union of Great Britain and Ireland*, London, 1799. (匿名)



19) 請求番号187

『連合の必要性』

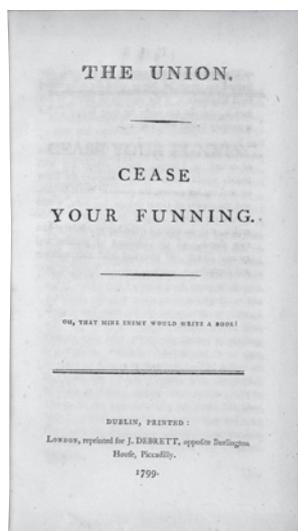
Anon., *Necessity of an Incorporate Union...*, London, 1799. (匿名)



20) 請求番号188

『連合一冗談は止めよ』

[Charles Kendal Bushe], *The Union, Cease Your Funning*, Dublin, 1799. (チャールズ・ケンダル・ブッシュ著)

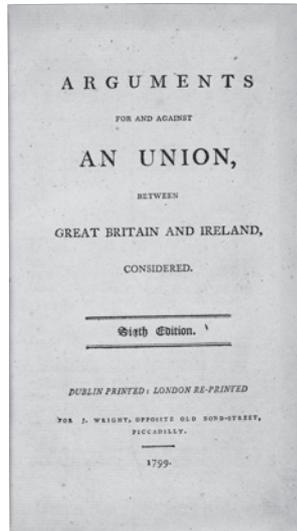


21) 請求番号183

『連合一賛否両論』

[Edward Cooke], *Argument For And Against An Union*, 6 ed., Dublin printed, London, reprinted, 1799.

(エドワード・クック著)

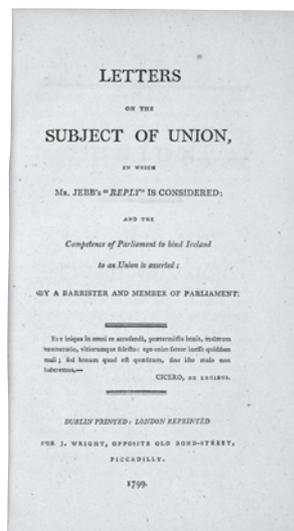


22) 請求番号186

『連合についての手紙』

[Sir William Cusack Smith], *Letters on the Subject of Union, in which Mr. Jebb's "Reply" Is Considered*,

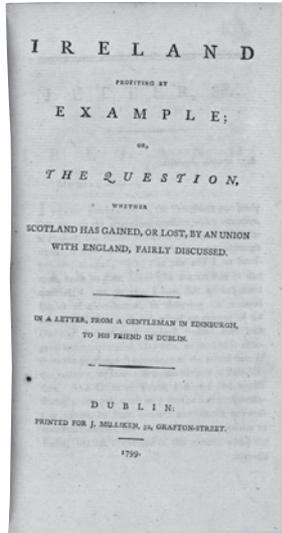
Dublin and London, 1799. (ウィリアム・キューザック・スミス著)



23) 請求番号185

『スコットランドの例から考えられるアイルランドの利益』

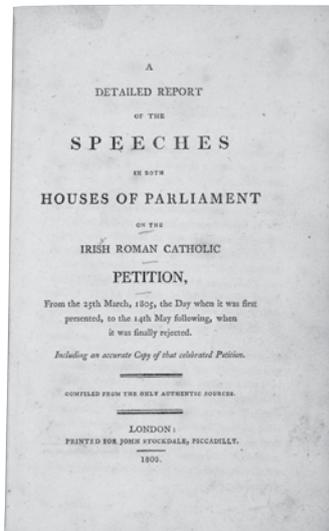
[Colonel Tittler], *Ireland Profiting by Example, or, the Question, Whether Scotland has Gained, or Lost by an Union with England, Fairly Discussed*, Dublin, 1799. (ティットラー大佐著)



24) 請求番号182

大ブリテン議会発行、『アイルランドのローマカトリックの請願についての上下両院における演説の詳細』

[Great Britain Parliament], *A Detailed Report of the Speeches in Both Houses of Parliament on the Irish Roman Catholic Petition...*, London, 1805.

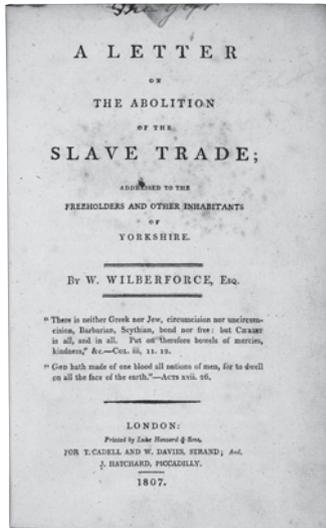


4. 奴隷貿易廃止から奴隷解放へ

25) 請求番号97

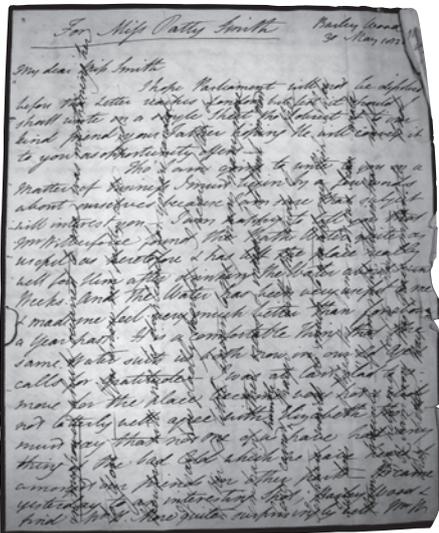
ウィリアム・ウィルバーフォース『奴隷貿易廃止についての手紙』

William Wilberforce, *A Letter on the Abolition of Slave Trade*, London, 1807.



26) 『ウィルバーフォースの書簡 1826年6月15日付』

William Wilberforce, Autograph Letter signed to Patty Smith, 4 pp. 8vo, Richmansworth, 15 Jun. 1826



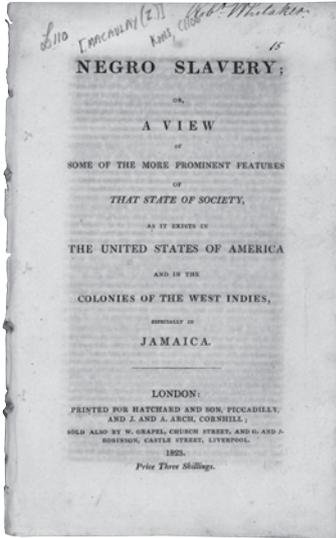
ウィリアム・ウィルバーフォース William Wilberforce, 1759-1833

政治家・奴隷解放運動家。ハルの富裕な商人の子に生まれ、ケンブリッジ大学在学中に小ピット (William Pitt, the Younger, 1759-1806) と親交を結んだ。1784年ごろ福音主義者になり、クラバム派の指導者になった。下院において雄弁をもって親友ピットの政策を支持するとともに、人道的・博愛主義的運動に献身した。特に、奴隷貿易禁止、奴隷制廃止運動に力をいれ、1787年の奴隷貿易廃止協会の設立に参画した。1807年に奴隷貿易が禁止された後も、1823年に反奴隷制協会を設立するなど反奴隷制運動に尽力し、奴隷制廃止法の成立直後に死去した。博愛主義者、人道主義者であった彼の財産の多くはさまざまな慈善運動に寄付された。

27) 請求番号97

ザカーリ・マコーリー 『黒人奴隷制』

Zachary Macaulay, *Negro Slavery; or, a View of Some of the More Prominent Features of that State of Society, as it Exists in the United States of America and in the Colonies of the West Indies, especially in Jamaica*, London 1823.



ザカーリ・マコーリー Zachary Macaulay, 1768-1838

貿易商、奴隷貿易反対論者。アフリカ貿易により財をなした商人で、西アフリカのシエラレオネ総督も務める。16歳の時ジャマイカに渡り、砂糖プランテーションに職を得たため奴隷制の実態について身をもって経験していた。1789年に帰国すると、義弟であるトマス・バビントンの熱心な福音主義に影響され、またバビントンを通じてウィリアム・ウィルバーフォースと出会う。奴隷貿易廃止協会を設立したグランビル・シャープの依頼によりシエラレオネへ赴任し、フランス海軍の襲撃を退けた功績などから1794年に総督となった。1804年に奴隷貿易廃止協会の正式なメンバーとなった。クラパム派の一員として奴隷制廃止運動に尽力し、この運動の一環として『黒人奴隷制』を執筆した。また、1802年から1816年まで『クリスチャン・オブザーバー』（*Christian Observer*）の編集も担当した。

Ⅲ. 教会と統治

18世紀終盤から19世紀初頭には、イングランドにおける正当な教義であるイングランド国教会（アングリカン・チャーチ）の立場から、自然と社会の秩序を聖書と整合的に説明する新たな試みが示された。ケンブリッジ大学のウィリアム・ペイリー（William Paley, 1743-1805）の『道徳・政治哲学原理』（1785年）は、この立場からモラルと統治を説明する議論として支配層に広く受け入れられ、同大学での標準的なテキストとなった。永井文庫にはそのペイリーの『自然神学』や、スコットランドの福音派の牧師として知られるトマス・チャーマーズ（Thomas Chalmers, 1780-1847）の『キリスト教の啓示』などが収められている。このようなイングランド国教会やスコットランド教会に属する思想家たちの著作が多く出版される一方で、当時の大きな宗教的問題の一つであった非国教徒の信仰の自由をめぐる問題についても多くの論考が公刊された。

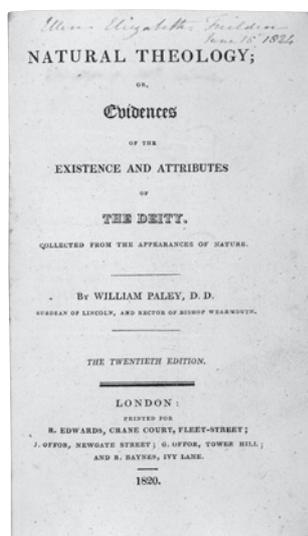
18世紀末に勃発した二つの革命（アメリカ革命とフランス革命）はイギリスの統治体制を考察するための契機ともなり、17世紀末以来の名誉革命体制下の統治のあり方をめぐって論争が活発に行われることになった。議会改革運動は、市民的自由や人民の権利をめぐる論争や立法と統治をめぐる支配層や知識人たちの理論的な考察とともに、さまざまな地域のさまざまな社会階層からの改革を要求する声にも促されて進んでいくことになる。永井文庫には、議員の発言録と並んで、マンチェスターやニューキャッスルなど地方からのうねりの様相を伝えるパンフレットが多く含まれている。1832年の議会改革は名誉革命以来の「賢人の統治」に対する微調整であるだけでなく、社会のさまざまな「声」に呼応する試みでもあった。

1. 宗教論の展開

28) 請求番号171

ウィリアム・ペイリー『自然神学』

William Paley, *Natural Theology; or Evidences of the Existence and Attributes of the Deity*, 20th ed., London, 1820.



『自然神学』は1802年に出版されて以来、彼の他の著作とともにケンブリッジ大学を中心に広く読まれた。この書物の中でペイリーが神の存在を説くために用いたいわゆるデザイン・アーギュメントにおける以下のような「時計の比喩」はよく知られている。--時計が野原に落ちているのを拾った人がその巧妙なデザインを見て、それを設計し製作した時計職人の存在を確信するのと同じように、巧妙で複雑な世界の設計者・製作者としての神の存在は疑うことができないだろう。

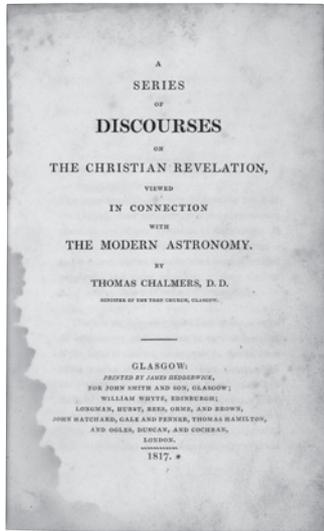
ウィリアム・ペイリー William Paley, 1743-1805

道徳哲学者・神学者。ピーターバラ生まれ。ケンブリッジ大学で学んだのち、同大学で道徳哲学や神学などを教えた。その後、イングランド国教会の聖職者として、教区牧師や大執事などの職を務めた。彼の『道徳・政治哲学原理』はいわゆる神学的功利主義の代表作である。道徳的義務は神の命令と来世の報償および刑罰によって作り出され、その内容は聖書と理性によって知ることができるし、神は人間の幸福を望んでいるため、行為の正・不正はそれが一般的幸福を増大させるか減少させるかによって決まると主張した。宗教的な奇跡と神の存在に関するデザイン・アーギュメントを批判したヒュームに対する反駁を行なった。彼の著作はケンブリッジ大学で19世紀後半まで長く教科書として用いられた。

29) 請求番号343

トマス・チャーマーズ『キリスト教の啓示』

Thomas Chalmers, *A Series of Discourses on the Christian Revelation, Viewed in Connection with the Modern Astronomy*, Glasgow, 1817.



本書の原型となったのは、1815年11月にグラスゴウのトロン教会で行われた説教である。それは宇宙人存在説に基づきキリスト教の教義の非科学性を批判したペインたちに対して、宇宙人存在説が福音の教えに矛盾しないことを力説し、熱狂を巻き起こした。この説教と、それに続く著書の出版に対する反響は大きく、『論説』は例外的な売れ行きを見せて合衆国やドイツでも出版され、チャーマーズを19世紀前半の福音主義運動の先頭に立たせることとなった。

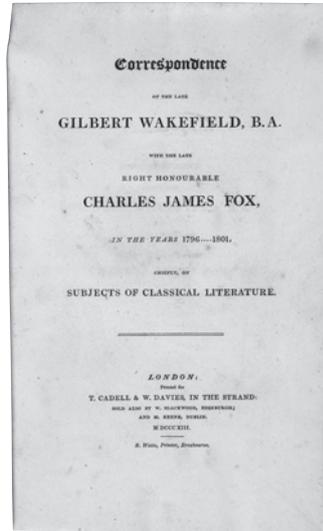
トマス・チャーマーズ Thomas Chalmers, 1780-1847

スコットランド、ファイフ生まれ。セント・アンドリュース大学卒業後、牧師となる。1823年、セント・アンドリュース大学道徳哲学教授、1828年にエディンバラ大学神学教授となる。以後、スコットランドでの福音派復権を主導する指導者となり、スコットランド教会の分裂を招いた。経済思想史上でもキリスト教経済学の主唱者の一人として足跡を残している。

30) 請求番号202

ギルバート・ウェイクフィールド『靈感について』

Gilbert Wakefield, *An Essay on Inspiration: Considered chiefly with Respect to the Evangelists*, Warrington, 1781.



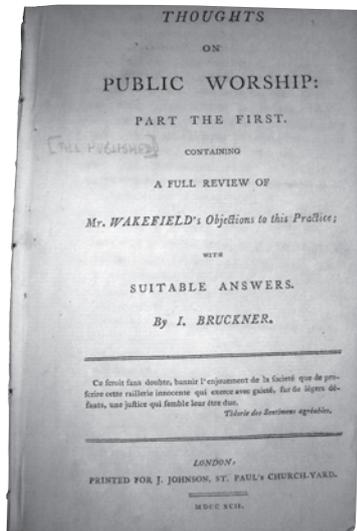
ギルバート・ウェイクフィールド Gilbert Wakefield, 1756-1801

ノッティンガム生まれの聖書研究家。ケンブリッジ大学ジーザス・カレッジ出身。1776年、学士号を取得後、1778年に教会の執事となるが、三位一体説と托身の否定に向かい、イエスは偉大な道徳哲学者であり、イエスの教えは人類を救済するために神から与えられたものであると考えるようになる。1779年、プリーストリーが教鞭をとったことで有名なウォリントン・アカデミー（Warrington Academy）で古典の講師の職を得た。真のキリスト教的道徳と相いれないとしてピット政権を批判するとともに、フランス革命に賛成した。同時にペインへ激しい批判も行い、ペインの『理性の時代』をピット的思想に偏っているとして糾弾した。『イギリスの時代の精神と比較したキリスト教精神』（*The Spirit of Christianity Compared with the Spirit of the Times in Great Britain*, 1794）と「エドモンド・バークのある貴族への手紙への回答」（*A Reply to the Letter of Edmund Burke, Esq., to a Noble Lord*, 1796）はアメリカで広く読まれた。

31) 請求番号464

ジョン・ブルックナー 『教会礼拝式について』

Bruckner, I.(John) *Thoughts on public worship; part the First. Containing a full review of Mr. Wakefield's objections to this practice; ...* London, 1792.



ジョン・ブルックナー John Bruckner (1726-1804)

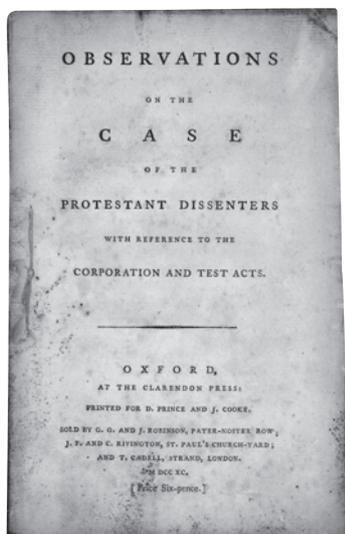
ゼーラント（オランダ）生まれのルター派聖職者。イングランド南西部のノリッジで教師を務めた。彼の著書の翻訳はトマス・マルサスの『人口論』に影響を与えた。

2. 審査律問題

32) 請求番号600

『プロテスタント系非国教徒と地方自治体法および審査律』

Anon., *Observations on the Case of the Protestant Dissenters with reference to the Corporation and Test Acts*, Oxford, 1790.(匿名)



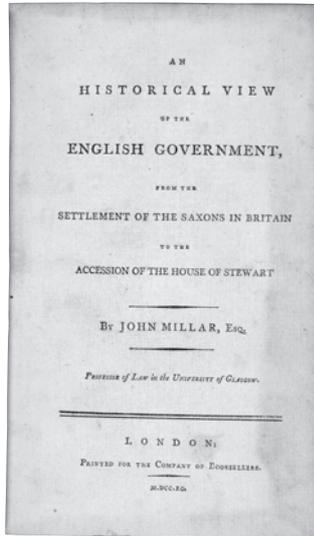
審査律（Test Act）は1673年に非国教徒の公職就任を禁止するために制定された「教皇主義を奉ずる国教忌避者より生ずる危険を防止する法律」の通称。反カトリック政策の一環として制定されたものの、名誉革命以降はプロテスタント系非国教徒への差別のためにも用いられることになり、1828年に廃止されるまで、イングランド国教徒以外は公職から締め出されることになった。なおプリーストリーも審査律に対しての批判者であった。

3. 統治論から議会改革論へ

33) 請求番号348

ジョン・ミラー『イングランド統治史論』

John Millar, *An Historical View of the English Government...*, London, 1790.



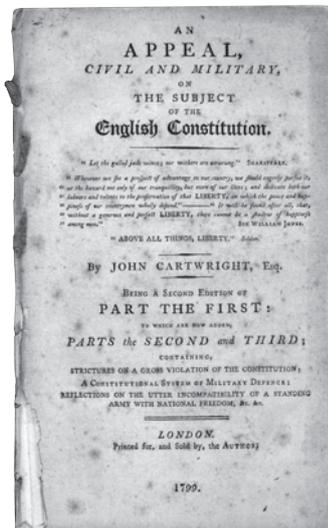
ジョン・ミラー John Millar, 1735-1801

スコットランド啓蒙後期を代表する思想家。グラスゴー大学でアダム・スミスの教えを受け、同大学法学教授となる(1761-1801年)。「イングランド統治史論」は、いわゆる意図せざる結果の論理に着目しながら、イングランドにおける商業と自由の発展を跡づけた国制史として高く評価されている。政治的にはフォックス派ウィッグであった。優れた教育者として多くの政治家・法律家を育てたほか、19世紀前半の思想家にも影響を与えた。

34) 請求番号58

ジョン・カートライト『イングランドの政体について』

John Cartwright, *An Appeal, Civil and Military on the Subject of the English Constitution...*, London, 1799.



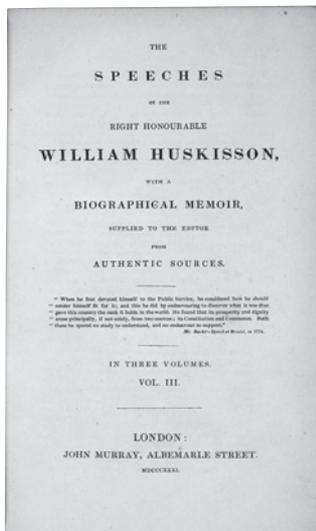
ジョン・カートライト John Cartwright, 1740-1824

政治改革運動家。1758年、海軍にはいり七年戦争にも参加した。70年に海軍を退き、75年から90年まで郷里ノッティンガムで民兵軍少佐として軍務に服した。その間アメリカ独立戦争に際して植民地側の立場を支持し、1780年には国制情報協会を組織して議会改革・男子普通選挙権などを主張した。1812年にはロンドン、つづいて北部工業地帯でハムデン・クラブ (Hampden Club) を設立した。奴隷制廃止を唱え、またギリシアやスペインでの民族運動を支持していた。「改革の父」と呼ばれた。

35) 請求番号271

ウィリアム・ハスキソン『ウィリアム・ハスキソン演説集』

William Huskisson, *The Speeches of the Right Honourable William Huskisson, with a Biographical Memoir...*, Vol. 1-3., London, 1831.



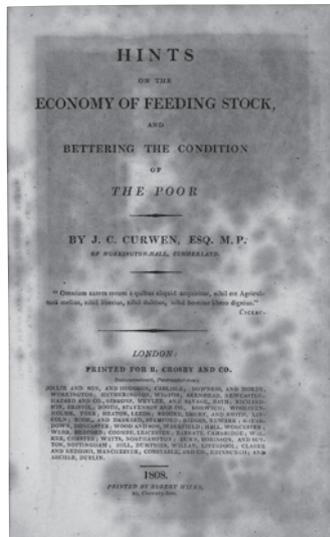
ウィリアム・ハスキソン William Huskisson, 1770-1830

政治家、自由貿易論者。1796年から1802年までと、1804年から死去するまでの期間、下院議員に選ばれ、ウィリアム・ピット William Pitt 内閣 (1804-05年) およびポートランド the Duke of Portland 内閣 (1807-09年) で大蔵大臣となり、のちには植民地相や下院議長も務めた。1814-1815年の穀物法論争にも参画し、穀物法や航海条例の改定にあたって大きな役割を演じた。

36) 請求番号360

ジョン・クリスティアン・カーウェン『農業経営論』

J. C. Curwen, *Hints on the Economy of Feeding Stock, and Bettering the Condition of the Poor*, London, 1808.



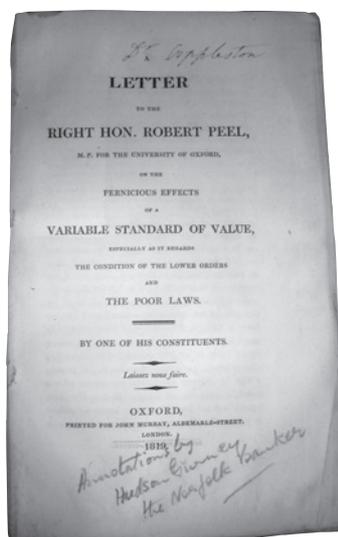
ジョン・クリスティアン・カーウェン J. C. Curwen, 1756-1828

スコットランド、カンバーランド生まれの農学者、政治家。ケンブリッジ大学で教育を受けるが、学位を取得せず退学する。スコットランドの進歩的農学者アーサー・ヤングを友人に持つ。1805年にワーキントン農業協会を組織し、19世紀前半の地方農業に深く影響を与えた。1807年には農業革新の功績に対して工芸振興協会から金賞が授与された。政治的にはウィッグで、カトリック解放、議会改革、穀物法廃止を訴え、下院議員の議席数を削減したカーウェン法（1809年）で知られている。『農業問題に関する提案』（1809）や『農業と地方人口を中心としたアイルランド国土の所見』（1818）を著した。1820年から亡くなるまでカンバーランド選出の下院議員として活躍した。

37) 請求番号234

エドワード・コプルストン『ロバート・ピール閣下への手紙』

Edward Copleston, *A Letter to the Right Hon. Robert Peel, M.P. for the University of Oxford... Variable Standard of Value... the Poor Laws. By one of his constituents*, Oxford, 1819.



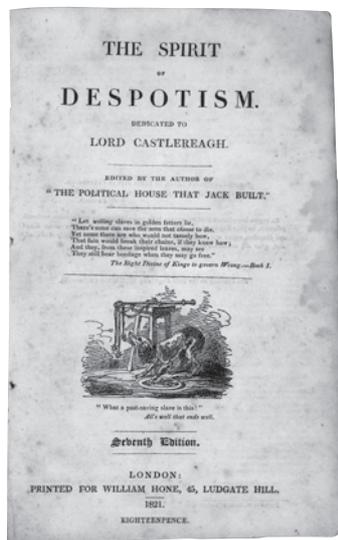
エドワード・コプルストン Edward Copleston, 1776-1849

デヴォン州生まれ。ランダフ主教、道徳哲学者。オックスフォード大学コーパス・クリスティ・カレッジで学んだ。1795年には同大学オリエル・カレッジで研究員となり、1802年には詩学教授となった。1806年から6年間、オリエル・カレッジの主任会計係に着任し、大学の財政状況の改善に貢献し、1814年にオリエル・カレッジの学寮長となった。リベラル・トーリーとして、1820年代には財政問題についてピールやウィリアム・ハスキッソンの相談役も務めた。教育論では『エディンバラ・レビューの誹謗に対する3つの回答』（1810-11）、経済学では『ピール卿への手紙』（1819）、神学では『貧困と予定説に関する教えの研究』（1821）などの著作がある。

38) 請求番号306

ウィリアム・ホーン『専制の精神』

[William Hone], *The Spirit of Despotism. Dedicated to Lord Castlereagh. Edited by the Author of "The Political House that Jack Built"*, 2nd ed., London, 1821.



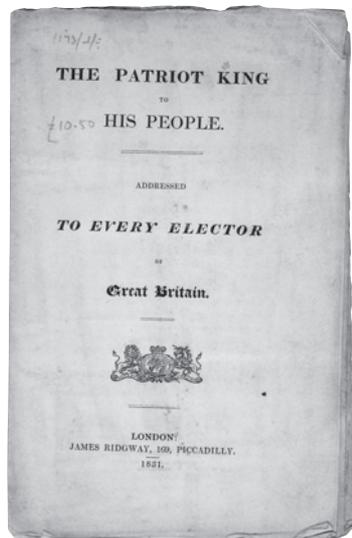
ウィリアム・ホーン William Hone, 1780-1842

イングランドの急進的なジャーナリスト、書籍商、出版者、風刺家。出版の自由の主張や、社会、政治批判で知られる。『トラベラー』（*The Traveller* (1814-15)) や『リフォーマリスト・レジスター』（*The Reformist's Register* (1816-17)) といった週刊誌を出版するとともに、多くのパンフレットを発表し、投獄や破産にも負けずに政府批判を続けた。

39) 請求番号442

チャールズ・ヘンリー・ベルデン・カール『人民の愛国王』

[Charles Henry Bellenden Ker], *The Patriot King to his People. Addressed to Every Elector of Great Britain*, London, 1831.



チャールズ・ヘンリー・ベルデン・カール Charles Henry Bellenden Ker, 1785-1871

法改革者。1804年、リンカーズ・イン法学院に入学し、14年から弁護士として活動を始める。ヘンリー・ブルームとは法学院時代の同期として親交があり、19年『エディンバラ・レビュー』にカールが最初に寄せた貧者の教育に関する論説の題材はブルームから得たと言われるほか、ブルームが創設した有用知識普及協会の熱心な会員としても知られている。1830年代以降には合名会社法や、不動産譲渡手続き関連法、刑法などの法改革に積極的に関与した。カールが積極的に推進した株式会社法（1844年）は、有限責任会社がイギリスで浸透する契機となった。

2つの革命の時代：18世紀後半から19世紀前半のイギリス

19世紀前半のヨーロッパは2つの革命を体験した。この2つの革命とは、産業革命とフランス革命である。前者は、蒸気機関に代表される技術革新を伴いながら、機械製の工場生産の普及をもたらし、最終的には資本主義の世界システムの確立にいたる、経済上の大きな変動であった。後者は、旧体制下での身分制と特権を廃止し、国民主権を確立して、国民国家の建設をめざす社会・政治上の大変革であった。産業革命の発祥地としてのイギリスはすでに17世紀に「市民革命」を経験していたが、フランス革命のひきおこした民主主義のうねりとも無関係ではありえなかった。

世界に先駆けてイギリスで起こった産業革命は、17世紀まで国民産業であった毛織物業を綿工業に替え、社会構造を大きく変えた。貴族・ジェントリを中心とした伝統的な地主層は18世紀後半になっても依然として政治の実権を握っていたが、19世紀になると新しく産業資本家などのブルジョワと、都市の工場で働く労働者がそれぞれ大きな社会集団、つまり「階級」として社会に登場した。産業革命の進行と都市化の進展のなかで、社会的な実力を身につけたブルジョワは第一次選挙法改正（1832年）により参政権をえ、さらに、1846年には地主層の反対を押し切って穀物法を廃止させ、自由貿易体制の道を開かせるまでになった。第一次選挙法改正で選挙権を与えられなかった労働者階級の人々は、成人男性の普通選挙権などを要求する「人民憲章」を掲げて、政治運動を展開した。これらの要求はすぐには実現しなかったが、1867年の第二次選挙法改正では都市の労働者に選挙権が与えられるなど、選挙権をえた人口は着実に増加していった。

19世紀を通じて、地主貴族、ブルジョワ、労働者の間の階級関係は幾度も緊迫したが、世紀前半には、奴隷貿易・奴隷制の廃止、公職におけるカトリック差別の廃止、選挙法の改正、穀物法の廃止など、自由主義的な改革が進み、地主貴族とブルジョワの融和がはかられた。労働者も世紀後半には、パックス・ブリタニカのもと、繁栄を享受してゆくことになる。

結局、2つの革命の時代を経てイギリスで国民的なコンセンサスとなったのは、自由主義であった。イギリスは早くも1820年代にウィーン体制から離脱し、独自の道を歩むようになったが、その背後にあったのもこの立場であった。

Ⅳ. ベンサムとオウエン

ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) とロバート・オウエン (Robert Owen, 1771-1858) はともに永井の研究において主役と呼ぶべき人物である。

ベンサムの最初の著作『統治論断片』は1776年に匿名で出版された。著者がベンサムであることはまもなく知られるようになり、この書物を読んだシェルバーン伯 (後にランズダウン侯爵) に認められ、1781年以降その邸宅に出入りするようになった。政治家としては国王から嫌われ民衆からも不人気であったシェルバーンは、しかし偉大な文芸のパトロンであった。彼の邸宅には多くの知識人が集っており、サミュエル・ロミリー、ジョゼフ・プリーストリー、それに後にベンサムのフランス語著作の編訳者となるデュモンらもいた。そのプリーストリーはベッカーリアやハチスンなどととともに、ベンサムの「最大多数の最大幸福」という発想に影響を与えた人物でもある。

フランス革命に際して、ベンサムはフランス議会に対して議会改革案を積極的に提言し、国王の解散権、一院制議会、人民の広範な選挙権や議員解職権などを主な内容とする『フランス憲法典草案』などを著した。ベンサムは、19世紀初頭になると、支配層が人民の利益を犠牲にして自らの私的利益のために権力を乱用していると考えようになり、権力の乱用を防止する「民主的支配」を確立するための急進的改革を支持する立場をとるようになった。1817年に刊行された『問答形式による議会改革案』はベンサムの急進的議会改革案の集約的な表現である。1818年に刊行した『イングランド国教会主義とその教理問答の検討』ではイングランド国教会の廃止と政教分離を説いた。

オウエンは若くして紡績業で成功し、1799年、スコットランドのニューラナークの紡績工場を買収して支配人となった。工場を経営するなかで、オウエンは、大多数の労働者は劣悪な環境の中で怠惰で不道德な人間となっていると考えるとともに、人間の性格はまったく環境に依存しているという環境決定論的性格形成論を信奉するようになった。彼はこのような理論的立場と生来の博愛主義に基づいて、工場内に学校や幼稚園を設立し、独自の教育方針をもって児童・成人教育にあたり、また労働条件の改善を図り、労働者の経営者への信頼の醸成と労働意欲の向上をめざした。

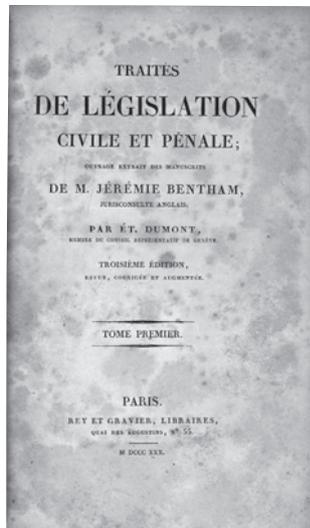
1820年に公表された『ラナーク州への報告』において、私有財産制度を否定して生産から消費までを構成員自らが行う大規模な協同村の構想を提案した。この提案は急進的過ぎて受け入れられることはなかったが、彼の思想は徐々に支持を集めるようになっていた。ベンサムもオウエンのアイデアに賛同し資金援助をした一人であった。ちなみに、環境決定論的性格形成論を展開した著作『社会についての新見解』(1813年)の出版にはベンサム主義者のジェイムズ・ミルやフランシス・プレイスが助力していた。

彼は1825年にアメリカに渡って、自給自足を原則とした私有財産のない共同生活村 (いわゆるニュー・ハーモニー) という壮大な実験を始めたものの、この事業は内部の対立や経済的な行き詰まりもあって1827年に失敗に終わった。イギリスに帰国した後は、著作の執筆の講演活動によって自らの思想の普及に努め、彼の理念は多くの支持者を獲得した。

40) 請求番号181

ジェレミー・ベンサム『民事および刑事立法論』

Jeremy Bentham, Etienne Dumont, *Traité de législation civile et pénale ouvrage extrait des manuscrits de M. Jérémie Bentham,...*, T. 1-3, Paris, 1830.

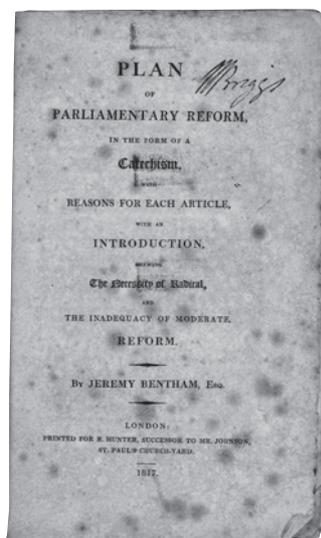


本書はベンサムの原稿をデュモンが編纂してフランスで出版したもの。初版は1802年。フランス語の本書によって、ベンサムの名は、母国イギリスにおいても、ヨーロッパ大陸や南北アメリカ大陸において広く知られるようになった。

41) 請求番号1

ジェレミー・ベンサム『問答形式による議会改革案』

Jeremy Bentham, *Plan of Parliamentary Reform, in the Form of a Catechism, with Reasons for Each Article, with an Introduction, Shewing the Necessity of Radical, and the Inadequacy of Moderate Reform,* London, 1817.



本書でベンサムは、人民の利益を正しく反映する唯一の制度として代議制民主政を高く評価し、選挙権の平等、実質的な普通選挙、毎年選挙、秘密投票などの急進的改革を提案した。本書は、ベンサムの著作の中では例外的によく売れ、議会の審議においても取り上げられた。

42) ジェレミー・ベンサムおよびトマス・ペロネット・トンプソン『道徳と統治における「最大幸福」原理』

Jeremy Bentham and Thomas Perronet Thompson, *The "Greatest Happiness" Principle in Morals and Government, Explained And Defended. In Answer to the Edinburgh Review*, 2nd ed., Pt. 1-2, Republished from the Westminster Review, no.21; on the 1st Aug. 1829.

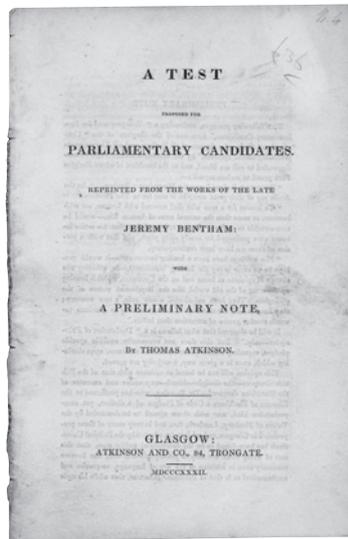


『エディンバラ・レビュー』1829年3月号にT・B・マコーリーがジェイムズ・ミル「政府論」を激しく批判する論文を発表したことに端を発した『エディンバラ・レビュー』と『ウエストミンスター・レビュー』の間で行われた論争は哲学的急進派とウィッグの対立のクライマックスであった。間もなく、マコーリーに反論するためにベンサムが書いた文章をT・P・トンプソンがまとめ直した上で、大幅に自らの文章を付け加えた論説が『ウエストミンスター・レビュー』1829年7月号に発表された。本パンフレットはそれを再刊したものの。

43) 請求番号456

ジェレミー・ベンサム『立候補者の審査』

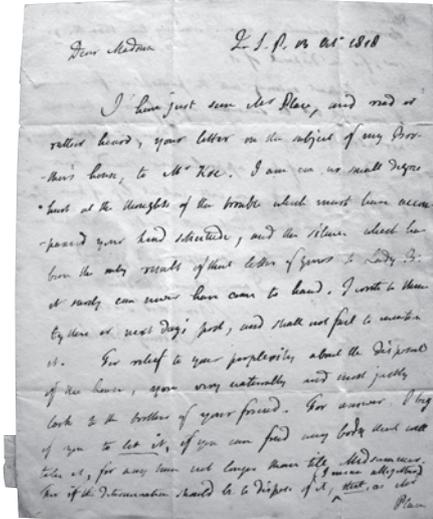
Jeremy Bentham, *Parliamentary Candidate's Proposed Declaration of Principles: or Say, a Test Proposed for Parliamentary Candidates*, London, 1831.



ベンサムが主張した「最大幸福原理」は著作によって表現に多少の違いがあるものの、このパンフレットでは「もっとも包括的で唯一の正しく適切な統治の目的」として次のように定式化されている。「当該の共同体の構成員の最大幸福、可能な限り例外なく構成員すべての最大幸福・・・。」

44) 『ベンサムの書簡 1818年10月13日付』

Jeremy Bentham's Letter, 13 October 1818.



ベンサムのマニエスクリプト、書簡の多くは今日では、University College London により収集され、新『著作集』が進行中である。

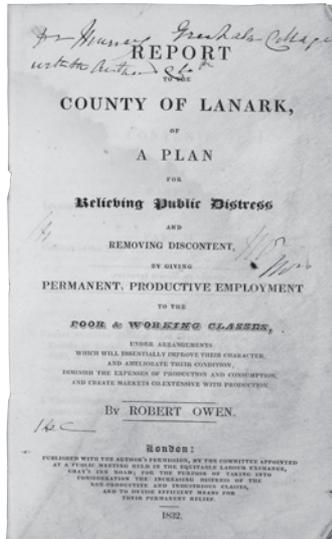
そのうち『書簡集』は完結に近づいている。

永井文庫にはベンサム自筆の書簡1点が所蔵されている。

45) 請求番号45

ロバート・オウエン『ラナーク州への報告』

Robert Owen, *Report to the County of Lanark, of A Plan for Relieving Public Distress and Removing Discontent, by Giving Permanent...*, London, 1832.

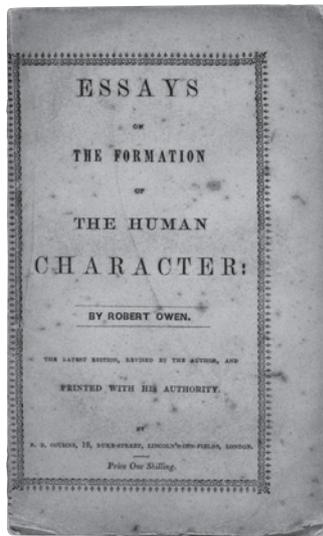


1820年に発表された本報告でオウエンは私有財産制度を否定して生産から消費までを構成員自らが行う大規模な協同村の構想を提案したが、この提案は急進的過ぎて受け入れられることはなかった。本報告は、1817年の『労働貧民救済委員会への報告』(*Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor*) とともに、オウエンの思想の博愛主義から社会主義への移行をしめしている。

46) 請求番号529

ロバート・オウエン『性格形成論集』

Robert Owen, *Essays on the Formation of the Human Character...*, London, [1840].



オウエンは「最良のものから最悪のものまで、また、もっとも無知なものからもっとも啓発されたものまで、どのような一般的な性格も、適切な手段を適用することによって、あらゆる共同体に、そして、広く世界中にさえも、与えられることができるし、その手段は、かなりの程度、人間事象に影響力をもっている人が自由にし、支配しているものである」と述べて、環境決定論的性格形成論を信奉していた。本書は彼の性格形成論のエッセンスがまとめられた著作。

ベンサム、哲学的急進派、功利性の原理

永井の研究における重要なトピックに、哲学的急進派 *Philosophic Radicals* あるいは哲学的急進主義 *Philosophic Radicalism* がある。哲学的急進派とはしばしばベンサム主義者 (*Benthamite*) とも呼ばれた、ベンサムのもとに集った改革派政治グループの呼称であり、そのメンバーは、ジェームズ・ミル (*James Mill*, 1773-1836) のほか、フランシス・プレイス (*Francis Place*, 1771-1854)、ジョージ・グロート (*George Grote*, 1794-1871)、ジョゼフ・パークス (*Joseph Parks*, 1796-1865)、ジョン・アーサー・ロウバック (*John Arthur Roebuck*, 1802-1879)、チャールズ・ブラー (*Charles Buller*, 1806-1848)、ジョン・ステュアート・ミル (*John Stuart Mill*, 1806-1873)、ウィリアム・モールズワース (*William Molesworth*, 1810-1855) などが挙げられる。「哲学的急進派」という名称は J・S・ミルが1830年代初頭に用いたものが一般に使われるようになったものと考えられており、彼は哲学的急進派を「政治において哲学者の慣行を守る人々。すなわち、手段を論じる時には目的を考察することからはじめ、結果を得たいと思う時には原因について考える人々」と呼んだ。

とりわけ晩年のベンサムは自らを「クイーンズ・スクエア・プレイスの隠遁者」と呼び、ごく限られた人と会うのみで執筆活動に専念しており、実際の活動において指導的な役割を果たし、また若い世代のメンバーに大きな影響を与えていたのはジェームズ・ミルであった。1824年には哲学的急進派の機関誌として『ウエストミンスター・レビュー』が創刊されたが、その創刊号にはウィッグの『エディンバラ・レビュー』とトーリーの『クォーターリー・レビュー』に対する激しい批判が掲載されており、既存の政治体制との対決姿勢が鮮明であった。ベンサムの『問答形式による議会議改革案』の出版 (1817年) やベンサム主義政治学の典型的表現であるジェームズ・ミルの「統治論」の公刊 (1820年) の頃から

1830年代にかけての哲学的急進派の活動は精力的であり、「改革の時代」における議会内外の論争において大きな役割を果たした。

哲学的急進派の理論的支柱はベンサムの政治理論、とりわけベンサムの思想の基礎になっていた「功利性の原理」であった。ベンサムは功利性の原理を「最大幸福原理」などとも呼んでいたりして、彼自身のターミノロジーも時期によって揺れ動いていたが、「最大多数の最大幸福が正・不正の基準である」と述べた処女作『統治論断片』（1776年）以来、この原理が彼の思想の基礎であることは不変であった。功利性の原理とは、『道徳と立法の諸原理序説』（1789年）によれば、「利害関係者の幸福を増進させるように見えるか減少させるように見えるかの傾向にしたがって・・・、あらゆる行為を是認または否認する原理」であった。幸福は快楽の享受と苦痛の不在から構成されており、功利性とは快楽（あるいは苦痛の不在）をもたらす性質のことであった。つまり、共同体あるいは関係者全体の幸福（快苦の総和）を促進する行為は正しく、そうでない行為は不正であるとする規範原理が功利性の原理であった（快楽主義的功利主義）。ベンサムは、この功利性の原理のみが行為の正・不正が問題になるあらゆる場面で適用されうる唯一の客観的で合理的な基準であるとみなした。

また、同じ『序説』の冒頭でベンサムは次のように述べている。

人間は自然によって苦痛と快楽という二人の統治者の支配の下に置かれてきた。彼ら苦痛と快楽だけが、私たちのすべきことを指示し、私たちのすることを決定する。彼らの玉座には、一方には正・不正の基準が、他方には原因と結果の鎖が結わえられている。

この言明が示しているように、ベンサムにとって、快楽と苦痛は規範原理であるだけでなく、人間心理についての説明・記述原理でもあった。人間心理についてのベンサムの立場は、簡潔に言えば、「人間の意識的な行為はつねに自分の利益を促進したいという動機によっている」というものであり（心理学的快楽主義）、彼はこれを「自己優先の原理」とも呼んだ。

ベンサムの議論に対しては、自己の利益のみを追求する人間がどのようにして功利性の原理にしたがって共同体全体の利益を考慮した行為をなすことができるのかという批判がしばしばなされる。しかし、ベンサムは道徳原理としての「共感と反感の原理」に対して激しい批判を浴びせてはいたものの、人々を慈善的行為に向かわせる自然的動機としての「共感」の存在を否定してはいなかったことを看過してはならない。また、彼は功利性の原理と自己優先の原理が一致しない場合（利害関係者全体の利害と個人の利害が一致しない場合）を想定して、この衝突を回避し解決に導く原理として「利益結合指示原理」を提示しており、このような重層的な構造がベンサムの功利主義的政治理論・道徳理論の枠組みとなっていたことに注意を払う必要があるだろう。

V. 「知」と実社会をめぐる諸相

18世紀後半から19世紀前半は、「知」を伝えるメディアの形態が多様化し始め、また、この「知」の受容者の範囲が広がりを見せた時代でもあった。この時代の知のメディアとしてとりわけ重要なのは定期刊行誌である。1802年に創刊された『エディンバラ・レビュー』をはじめ19世紀前半には多くの定期刊行誌が登場し、広範な読者を獲得するとともに、大きな社会的影響力を持つようになったという点で、この時代は「定期刊行誌の時代」であった。また、科学者や哲学者の専門的知識と産業の進展のなかで生まれてきた実践的知識とを橋渡しする「知」が多く語られることになったのも、この時期の特徴である。永井文庫が所蔵する『ジェントルマン・ファーマー』はスコットランド法の権威であったケイムズ卿の著作である。「健康で長寿な人生を手に入れる方法」を謳い文句にした17世紀イタリアのコルナーロの著作は英訳され、18世紀を通じてロングセラーの一つであったし、『家政の哲学』の著者であるチャールズ・シルヴェスターはオウエンのプランによる病院建設の推進者でもあった。

18世紀末から19世紀前半にかけては、ブルー・ストッキングス *Bluestockings* と呼ばれる女性の思想家・作家のグループが活躍するなど、女性への教育の普及と地位向上の動きが起きつつあったし、大衆の教育が重要な課題となるのもこの時期であった。ちなみに、1920年代日本の女性解放運動の担い手である平塚雷鳥らが「青踏社」と名乗るのは、このグループのひそみに倣ったものである。

英国絵画については、近年、わが国ではラファエル前派が強い関心を抱かれるようになりつつある。このグループが標的にしたのは、ロイヤル・アカデミーの初代会長であったジョシュア・レイノルズらであった。このような、いわば正統な英国絵画の登場の裏面において、ウィリアム・ホガース (William Hogarth, 1697-1764) 以来の風刺画の系譜はジェイムズ・ギルレイを主要な担い手としながら、政治批評の絵画として広がりを見せる。1820年前後には挿絵入りの政治パンフレットが多く生まれ、名誉革命直後のパンフレット合戦とは明らかに異なる画像メディアの姿がそこからは伺い知れる。

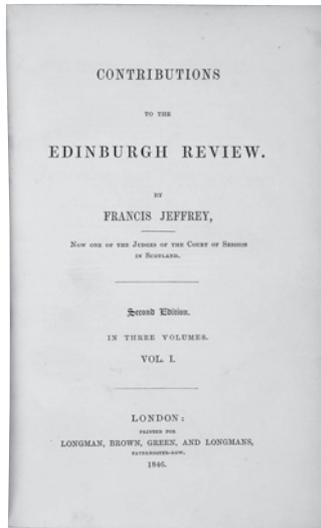
1. 知の媒介者としてのレビューアー

19世紀前半は言論空間において定期刊行誌が大きな影響力をもちはじめた時代であった。そのパイオニア的存在であったのは『エディンバラ・レビュー』であった。1802年10月10日に創刊された『エディンバラ・レビュー』は、“*judex damnatur ubi nocens absolvitur*”をモットーとし、出版はアーチボルド・コンスタブル (Archibald Constable, 1774-1827) が担った。創刊号は価格5シリング、初刷750部であった。売れ行きはきわめてよく、翌月には増刷され、1年以内にエディンバラだけで2000部が売れたと言われている。当時は珍しかった専任の編集者と高額原稿料という体制によって高い質を確保することに成功し、19世紀イギリスの言論界において重要な役割を果たした。とりわけウィッグ支持の立場を鮮明にした1808年以降、さまざまな改革を支持する論陣を張って大きな影響力をもつようになった。ウィッグ支持の同志に対抗するため、1809年にはトリー支持の『クォーターリー・レビュー』が、1824年に急進派支持の『ウエストミンスター・レビュー』が創刊された。創刊に中心的な役割を果たした4人、つまりフランシス・ジェフリー、シドニー・スミス、フランシス・ホーナー、ヘンリー・ブルームは、いずれもイギリスの言論界・政界において重要な地位を占めるようになった。

47) 請求番号227

フランシス・ジェフリー 『『エディンバラ・レビュー』寄稿論集』

Francis Jeffrey, *Contributions to the Edinburgh Review*, 2nd ed., Vol. 1-3, London, 1846.



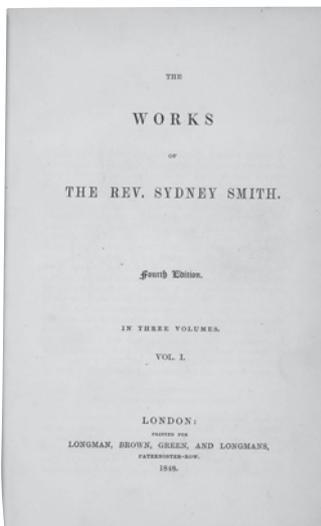
フランシス・ジェフリー Francis Jeffrey, 1773-1850

スコットランド、エディンバラ生まれの文学批評家。はじめグラスゴー大学、後にエディンバラ大学で学び、1791-92年にはオックスフォード大学クイーンズ・カレッジにも留学した。1802年、ホーナー、スミス、ブルームらとともに『エディンバラ・レビュー』を創刊し、1803から29年まで編集者を務めた。その後は批評・伝記・政治・倫理についてのエッセイを寄稿し続けた。ロマン主義を嫌っていた彼は、同誌にバイロンや湖畔詩人への激しい批判を寄稿した。1830年『エディンバラ・レビュー』が強く支持したウィッグが政権を得ると、スコットランドで法務長官に任命された。下院議員としてスコットランド改革法案（1831年）の成立に尽力し、34年ジェフリー卿となった。

48) 請求番号221

シドニー・スミス 『シドニー・スミス著作集』

Sydney Smith, *The Works of the Rev. Sydney Smith*, 4th ed., Vol.1-3, London, 1848.



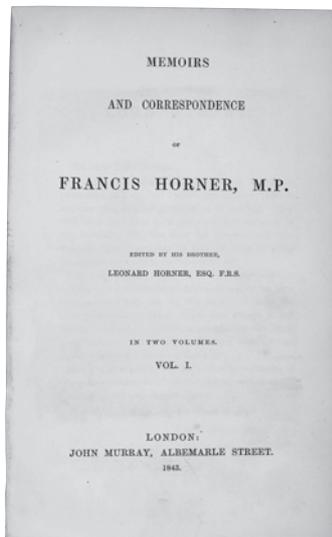
シドニー・スミス Sydney Smith, 1771–1845

イングランドのエセックスに生まれ、オックスフォード大学ニュー・カレッジで学んだ。1798年からエディンバラに滞在した折にデュガルド・ステュアートの影響を受け、ジェフリー、ホーナー、ブルームとも親交を結んだ。『エディンバラ・レビュー』の構想を最初に抱いたのはスミスであり、同誌が創刊されると最初の3号の編集者を務めた。1803年にロンドンに来て、ホラント卿（チャールズ・ジェイムズ・フォックスの甥）の邸宅ホラント・ハウスに出入りし、ウィッグの政治家や思想家の知遇を得るようになった。セント・ポール寺院の司祭も勤めるなど宗教界においても重きをなした。

49) 請求番号237

フランシス・ホーナー 『フランシス・ホーナーの伝記と書簡』

Francis Horner, *Memoirs and correspondence of Francis Horner, M.P.*, Vol. 1-2, London, 1843.



フランシス・ホーナー Francis Horner, 1778–1817

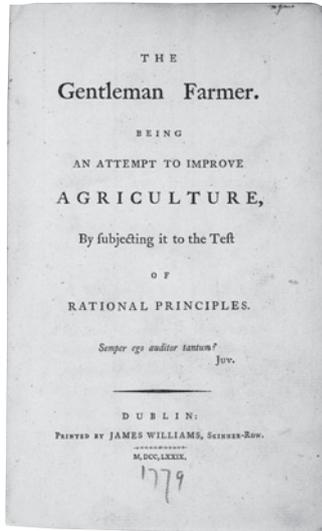
エディンバラ生まれの政治家。エディンバラ大学を卒業後、ロンドンのリンカーンズ・インに学び、サミュエル・ロミリーやジェイムズ・マッキントッシュらの知遇を得る。自らも創刊に関与した『エディンバラ・レビュー』にも積極的に寄稿した。デュガルド・ステュアートの門下生のうち、経済学をもっともよく理解していたうちの一人であったといわれ、地金論争（1810年）、穀物法論争（1814-15年）などの当時の重要な経済論争において重要な役割を果たした。

2. 「知」と実用の考察

50) 請求番号398

ケイムズ卿『ジェントルマン・ファーマー』

[Lord Kames], *The Gentleman Farmer. Being an Attempt to Improve Agriculture, by Subjecting it to the Test of Rational Principles...*, Dublin, 1779.



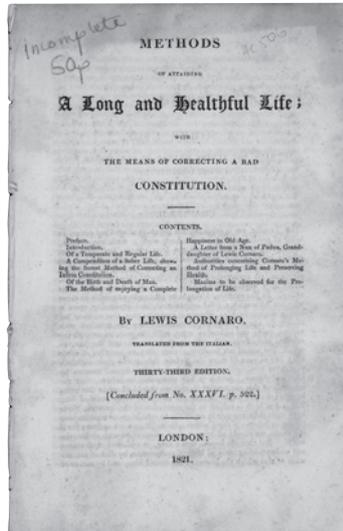
ケイムズ卿 Henry Home; Lord Kames, 1696-1782

スコットランド啓蒙を代表する法曹知識人。1752年にスコットランド高等民事裁判所常任判事となり、以後ケイムズ卿となった。哲学では、ヒュームの懐疑論に対抗し、その道徳論と認識論を批判した『道徳と自然宗教の原理』を著し、彼の議論はトマス・リードのコモン・センス哲学に継承されていた。アダム・スミスを取り立てるなど、スコットランド啓蒙思想家の庇護者的な役割を果たした。また、限嗣封土権の廃止を訴えたり、リンネル産業振興や農業改良運動に積極的に関与したりするなど、スコットランドの近代化に尽力した。

51) 請求番号477

ルイジ・コルナーロ 『健康で長寿な人生を手に入れる方法』

Lewis Cornaro, *Methods of Attaining a Long and Healthful Life*. ..., Translated from the Italian, 33rd ed., London, 1821.



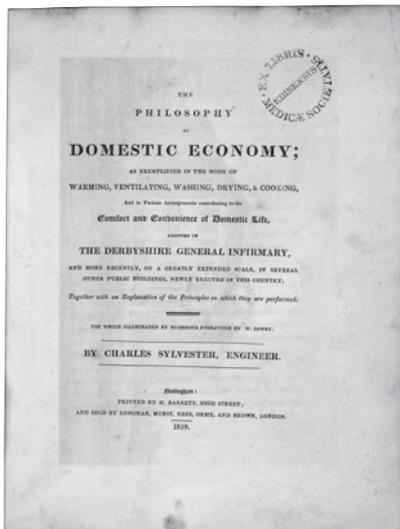
ルイジ・コルナーロ Alvisè Luigi (Lewis) Cornaro, 1468-1566

イタリア、ヴェネツィアの貴族。若いころの不摂生で健康を害し、40歳頃には死を予感するほどの病苦に苦しむが、自ら考案した養生法で乗り越えて、長寿を全うした。83才の時（1558年）に『節制論』を著した。同著には86歳、91歳、95歳の時に同じ題名の補遺が追加されて、4章からなる大著となった。この本はヨーロッパ各国語に翻訳され、版を重ねて、長く読まれる国際的ベストセラーとなった。

52) 請求番号384

チャールズ・シルヴェスター 『家政の哲学』

Charles Sylvester, *The Philosophy of Domestic Economy*...., Nottingham, 1819.



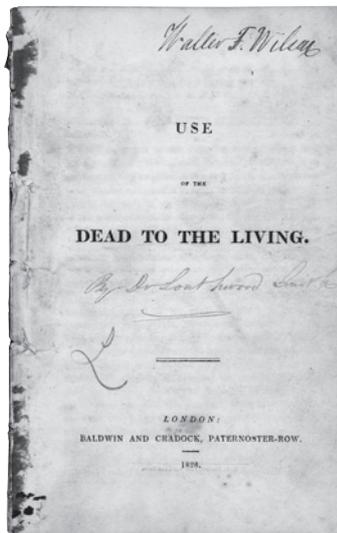
チャールズ・シルヴェスター Charles Sylvester, 1774-1828

イングランドの発明家、エンジニア。独学で科学的知識を身につけ、ガルヴァニズム（湿った環境下における異種の金属の接触によって生じる連続的電流という現象）などをめぐる数々の発見や発明を行う。また若いころから政治的急進主義に傾倒した。1807年からはダービーで化学と数学を教えるようになるが、そのころにウィリアム・ストラット（William Strutt, 1756-1830）とともにダービー病院の暖房、換気システムを考案し、それが主著『家政の哲学』の基礎となった。後には蒸気機関車にかかわる技術開発にも貢献した。

53) 請求番号445

トマス・サウスウッド・スミス『生者のための死者の活用』

[Thomas Southwood Smith], *Use of the Dead to the Living*, London, 1828. (初版は1827年)



トマス・サウスウッド・スミス Thomas Southwood Smith, 1788-1861

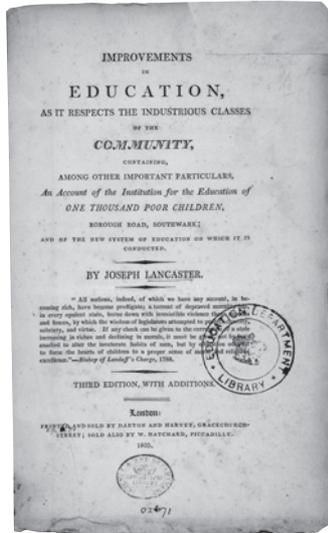
イギリスの医師、ユニテリアン。エディンバラで医学を学び、1824年、ロンドン熱病病院の医師となる。1830年には『熱病論』を著し、貧困と伝染性熱病の関係を指摘した。公衆衛生改革にも積極的に関与した。1827年に出版したパンフレット『死者の生者への活用』において、死体を解剖して医学研究に役立てることを主張した。ベンサムと親交が深く、ベンサムが1832年6月6日に亡くなると、ベンサム自身の遺志にしたがって、その3日後にベンサムの遺体による解剖学講義をおこなった。

3. 教育と知の普及

54) 請求番号228

ジョゼフ・ランカスター 『教育の改善』

Joseph Lancaster, *Improvements in Education, as it Respects the Industrious Classes of the Community, containing, among other Important Particulars, an Account of the Institution for the Education of one Thousand Poor Children, Borough Road, Southwark ;and of ...* 3rd ed., with add, London, 1805.



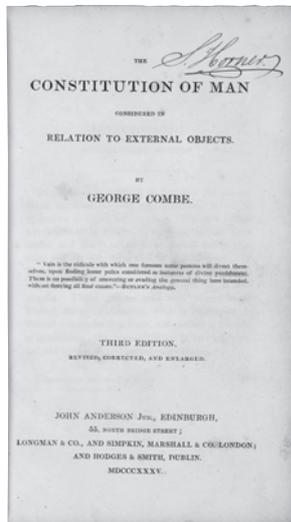
ジョゼフ・ランカスター Joseph Lancaster, 1778-1838

ロンドン生まれの教育者。授業料を払う余裕のない家庭の子供であっても無料で教育を受けられる「フリースクール」を創設するなど教育改革を行った。1803年に彼の教育手法を記述した『教育の改善』を出版し、大きな反響を得た。

55) 請求番号375

ジョージ・クーム 『人間の構造』

George Combe, *The Constitution of Man, Considered in Relation to External Objects*, 3rd. revised, corrected and enlarged, Edinburgh, 1835.



頭蓋の形状を外的に観察することによって人間の性格を知ることができるとする骨相学は、ヴィクトリア女王夫妻が子供の頭蓋の形状を診断させるなど、性格形成論・教育論として19世紀前半のイギリスにおいて一世を風靡した。ジョージ・クームはイギリスにおける骨相学の展開においてもっとも重要な人物であり、本書はその代表作。

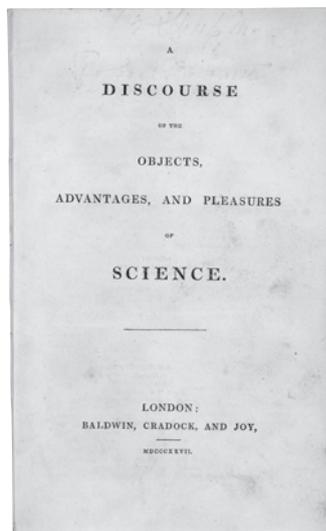
ジョージ・クーム George Combe, 1788-1858

19世紀イギリスの代表的な骨相学者。エディンバラ大学を卒業後、弁護士の修行をしたが、骨相学と教育論に没頭するようになる。当初はガルやシュプルツハイムの骨相学を嘲笑していたが、当時エディンバラで講義をしていたシュプルツハイムの脳の解剖を友人宅で実見して感銘を受け、講義に出席して自ら研究を始めた。クームの講義や著作はイギリス、アイルランドならず、ヨーロッパや合衆国でも反響をよんだ。またクームは貧困層の救済と教育にも力を尽くした。

56) 請求番号562

ヘンリー・ブルーム『科学の目的、進歩およびその享受について』

[Henry Brougham], *A Discourse of the Objects, Advantages, and Pleasures of Science*, London, 1827.



本書は有用知識普及協会の出版物として刊行され、ブルームが有用知識普及協会の理念を敷衍する形で、科学の有用性について述べたもの。自然科学を分類した上で、それらの科学の特徴や習得することの重要性、社会における有用性などを論じている。

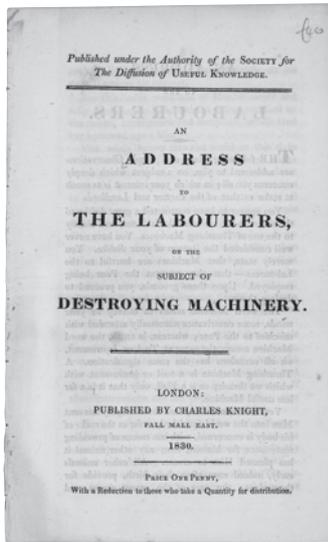
ヘンリー・ブルーム Henry Peter Brougham, 1778-1868

エディンバラ生まれの政治家。エディンバラ大学に学んだ。1802年に『エディンバラ・レビュー』の創刊に関与し、以降も積極的に論説を寄稿した。当初は政治色の薄かった同誌をウィッグ支持の雑誌としたのはブルームであった。1812年のいわゆるキャロライン王妃事件で王妃の弁護をして名を上げた。下院議員としてこの時期のさまざまな政治・社会改革に尽力した。1830年に成立したウィッグのグレイ内閣では大法官となり、1832年の選挙法改正に重要な役割を果たした。教育改革にも積極的な関心を示し、ロンドン大学創設や有用知識普及協会設立などの事業を主導した。ベンサムやジェイムズ・ミルなどとも親しく、自ら「ベンサム主義者」と述べていた。

57) 請求番号500

チャールズ・ナイト『労働者達に訴える』

Charles Knight, *An Address to the Labourers, on the Subject of Destroying Machinery*, London, 1830.



チャールズ・ナイト Charles Knight, 1791-1873

ウィンザー生まれの出版者、文筆家。幼少期から文学へ興味を持つ。ウィンザーでは成人期の初めまでを過ごし、とりわけ歴史や法律に親しんだ。読書クラブを設立する一方で詩、随筆、戯曲を書き、ジャーナリストとしても活動する。その後、ロンドンに拠点を移し出版者としても経歴を積んだ。1820年代中頃には、安価で有用な重要研究の抄本を公刊するという壮大な計画を持っていたが資金面での問題に直面した。1826年親しい友人のマシュー・ダヴェンポート・ヒルを通じてブルームと知り合うと、ブルームがナイトの計画に興味を持ったことで交際が深まり、同年、ブルームによって有用知識普及協会が設立されると、その運営に積極的に協力した。1830-40年代のロンドンにおける文学・出版・政治サークルの中で著名な出版者であった。

有用知識普及協会 Society for the Diffusion of Useful Knowledge

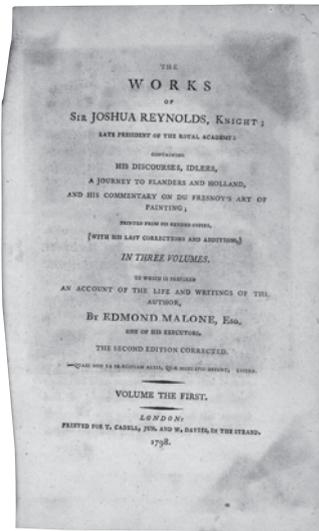
有用知識普及協会はヘンリー・ブルームの主導によって1826年に設立された。ラッセル卿、オルソープ卿、ザカリ・マコーリーなどのウィッグのほかに、ジェイムズ・ミル、ジョゼフ・ヒューム、ジョージ・グロートなどの急進派も参画した。「共同体のあらゆる階級、とくに熟達した教師に学ぶことのできない人々や独学によって学びたいと考えている人々に有用な情報をあたえること」ことを目的として安価な書物を出版した。当時新しく設立されたロンドン大学とも密接な人的つながりを持っていた。またチャールズ・ナイトのような出版人も協力しており、同協会の出版物の成功はナイトに負うところが大きい。財政難などもあって1848年に解散したが、最盛期には『ペニー・マガジン』を週に20万部発行するなど活動的であった。

4. 表象化されるメディア

58) 請求番号229

ジョシュア・レイノルズ『ジョシュア・レイノルズ作品集』

Joshua Reynolds, *The Works of Sir Joshua Reynolds*, Vol. 1-3, 2nd ed., Corrected, London, 1798.



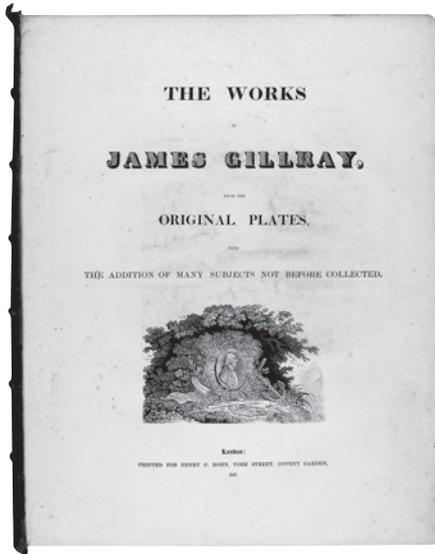
ジョシュア・レイノルズ Joshua Reynolds, 1723-1792

イギリス新古典主義の肖像画家、美術理論家。デヴォン州生まれ。古典文学とともに、レオナルド・デュフレノワ、フェリビアン美術理論に親しむとともに、J・リチャードソンの画論に傾倒した。1750-52年、イタリア、フランスを訪れ、帰国後、拠点をロンドンに移し、絵画技法の総合的探求を進める。1764年にはジョンソンの「文芸クラブ」設立に参加した。1768年、ロイヤル・アカデミーの創設とともに院長就任し、翌年の開学から1790年まで、15回の「芸術講話」を行った（『十五講話集』）。学問的には歴史画の優位を説いたが、パトロン制度を重んじ、生涯にわたり上流階級の肖像画を描いた。党派的にはウィッグであった。

59) 請求番号215

ジェイムズ・ギルレイ 『ギルレイ作品集』

James Gillray, *Works of Gillray*, London, [1873?]



ジェイムズ・ギルレイ James Gillray, 1756-1815

18世紀後半のイギリスを代表する風刺画家。政治や社会を風刺した数々の作品で有名。ジョージ三世後期の政治を批判した政治風刺画はイギリスのみならず、ヨーロッパ中に知られた。彼の作品にはジョージ三世をはじめとする王族、ジェイムズ・フォックス、ウィリアム・ピット、エドモンド・バーク、ナポレオンなどの国内外の政治家が登場する。

VI. 永井義雄の世界

開国から明治維新に向かう時期、日本の知識人たちは蘭学で培ってきた素養をもとに英学を切り拓き、急速に英語圏の知を摂取した。ジョン・ステュアート・ミルの『自由論』 (*On Liberty*, 1859) は、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の『自助論』 (*Self-Help*, 1859) と並んで、いち早く元幕臣の中村正直によって『自由之理』として翻訳された。五冊本の和綴じの木版印刷は、江戸時代に蓄えられた印刷技術が欧米の知識の摂取を担った当時の雰囲気をよく伝えている。ベンサム著作はミルよりも遅く、1883-84年に『道徳および立法の諸原理序説』 (*An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, 1789) が『利学正宗』として翻訳された。これは政治疑獄のもとで山形から仙台の監獄へと移された陸奥宗光が、その獄中における成果として生み出したものである。

明治政府が憲法制定の際にドイツ系立憲主義に範を取ったこともあって、欧米の思想と制度を摂取し移植するに当たってモデルとする国はやがてドイツへと移っていくことになった。これに対して、第二次大戦後の思想家・知識人たちはあらためて英語圏の思想と向かい合うことになった。永井義雄もまた第二次大戦後の日本でイングランドの思想と向き合った一人である。

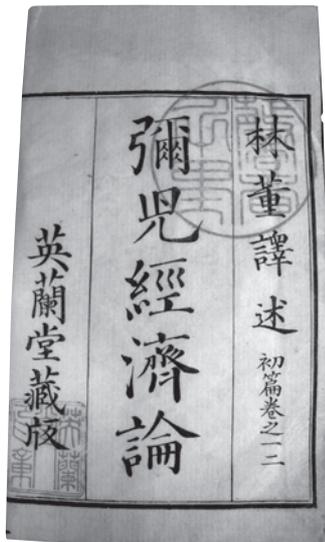
永井の研究テーマは、「国家の権力基盤の強化よりも、人びとの生活基盤の向上を意図する民主主義的改革思想」としての急進主義であり (『自由と調和を求めて』、viii頁)、その議論はつねに問題提起的であり続けてきた。それは、ともすると礼賛に陥りがちな我が国の啓蒙観とは一線を画し、「啓蒙とは、迷妄のうちにいるものを餌食にすることを許容して恥じない強権的帝国主義的体質の別名」 (同上、iii頁) であると喝破する自らのラディカルな立場に結びつくものであった。ここではオウエンについての当時の通説と対峙した処女作『イギリス急進主義の研究』以来の永井の主要な著作を展示する。また、永井は古典の翻訳にも意欲的であり、彼の代表的な翻訳も合わせて展示する。

60) 請求番号93

中村敬太郎訳『自由之理 全五巻』 (同人社, 1872) : J・S・ミル『自由論』 (*On Liberty*, 初版1859年) の翻訳



- 61) 林薫訳『弥児経済論』（島村利助（發兌），1876）：J・S・ミル『経済学原理』（*Principles of Political Economy*，初版1848年）の翻訳



- 62) 請求番号92

陸奥宗光訳『利学正宗』（薔薇楼，1883-84）：ジェレミー・ベンサム『道德と立法の諸原理序説』（*An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*，初版1789年）の翻訳

利学正宗上巻目次

第一條	第一篇 實利主義 人類ハ苦樂ノ制スル所トナル者ナリ
第二條	何ヲカ實利主義ト云フ
第三條	實利ノ字義如何
第四條	社會ノ利益ト云フノ字義如何
第五條	(篇表目) 實利主義ニ管同スル行爲トハ何ツヤ
第六條	實利主義ニ管同スル政府ノ治國トハ何ツヤ
第七條	實利主義ノ法律即チ聽命トハ何ツヤ
第八條	何人ヲ指シテ實利主義ノ黨類ト云フ可キ乎
第九條	當爲不當爲應ニ正不正等ノ語ハ如何ニ解スヤ
第十條	

目次一

永井文庫希少本リスト

西洋近代思想に関する基本的な文献は、現在、Goldsmith-Kress 文庫、British Library、ESTC（18世紀イギリスで出版された書物のオンラインデータベース）の所蔵・所収分について、容易に検索、閲覧できる体制が整えられつつある。そのような中であって、永井文庫ならではの文献と思われるものをピックアップしたのが以下のリストである。今後の精査に期する部分も残しているが、永井文庫中の希少本の代表例として、ご参考までに紹介する次第である。

No.	請求番号	著者名	書誌	出版年	冊数
1	372	(Anon.)	Alarming distress of the country. Speeches at the meetng at the London tavern, held on the 29th day of Jury, 1816,for the purpose of raising a subscription for the relief of the distressed poor, to which is added the resolutions and speeches, at... Bolton	1816	1
2	440	(Anon.)	Sketch of the life & character of John Hampden, a true & faithful representative of the people in Parliament, a staunch and able opposer of tyranny, and a reformer both in theory and practice... London, 1819.	1819	1
3	285	(Anon.)	Conversations on corporation and test acts... 2nd ed. London, 1827.	1827	1
4	433	(Anon.)	The employer and employed : a familiar dialogue.	1843	1
5	4	Bentham, Jeremy, 1748-1832	The Pamphleteer : dedicated to both Houses of Parliament. v.22. London, 1823.	1823	1
6	3	Bentham, Jeremy, 1748-1832	Táctica de las asaambleas legislativas; por Jeremias Bentham. Nueva edicion revista y corregida, Burdeos (Bordeau) 1829.	1829	1
7	460	Brierley, E.	Grammar School, Over Kellet. [N.p., n. d.] 1 leaf.	1849	1
8	472	Chabannes,Marquis de,	Réponse du marquis de Chabannes à la lettre de S. Exc. M. le maréchal duc de Feltre, ministre de la guerre.... Londres, 1817.	1817	1
9	476	Cobbett, William	Mr. Cobbett's answer to Mr. Stanley's manifesto. [London], N. d.		1
10	14	Constant,Benjamin de	An eulogium on Sir S.Romilly, Pronounced at the Rpyal Atthenaeum of Paris,... Ed. By Sir T.C. Morgan) London, 1819	1819	1
11	478	Croxall, Caleb	What will reform do?, or, A brief statement of the practical benefits of a reform in Parliament : ... 2nd ed. London, [n.d.]	1832	1
12	64	Edgeworth,Maria,	Moral tales. 6th ed. Vol. 1-3. 1813. With Exlibris. Alexander Speirs Esq., Elderslie)	1813	3

13	211 5	Erskin, Thomas, 1750-1823	Speeches of Lord Erskine : when at the bar, on miscellaneous subjects. A new ed., London, 1827.	1827	1
14	103	Father of Candor, pseud., Zenger, John Peter, 1697-1746, Somers, John Somers, Baron, 1651-1716	A select collection of the most interesting tracts, which appeared during the years 1763, 1764, and 1765., London 1766.	1766	1
15	257	Fleetwood, J	The life of our lord and saviour Jesus Christ;.... Glasgow, 1809.	1809	1
16	73 1	Newgate calendar, The	The new Newgate calendar, or, Modern criminal chronology, comprehending the most remarkable cases which have occurred between the years 1796 and 1826. v.1. London, 1826.	1826	1
17	526	Nott, John	A third letter from John Nott, jun. to his fellow townsmen. [Birmingham, Oct. 25, 1819]	1819	1
18	300	Pearson, Charles	The substance of a speech delivered by Charles Pearson,... to which is added, a letter from Mr. Pearson,... London, [1819]	1819	1
19	543	Potter, Edmund	Some opinions on co-operative associations, a paper read at the Meeting of the British Association in Manchester, Sept. 6th, 1861. London, 1862	1862	1
20	239 2 - 3	Sidney, Algernon, 1622-1683	Discourses on government / by Algernon Sidney ; published from an original manuscript of the author ; to which is added, an account of the author's life, and a copious index. V.2-3. In three volumes. New York, 1805.	1805	2
21	567	Tatham, Edward	Doctor Tatham's letter to Mr. Pitt, on the national debt. A new ed. London, 1797.	1797	1
22	308	Ventura, Gioacchino, 1792-1861	La religion et la liberté : oraison funébre de Daniel O'Connell, prononcée à Rome les 28 et 30 Juin 1847. 3e ed. Paris, 1848.	1847	1
23	587	Williams, Philip, Esq.	A letter to the Right Hon. The earl of Shaftesbury, on the two reports of the commisioners,... London, 1830. (Disbound)	1830	1
24	589	Wordsworth, Rev. Charles	A letter to the Right Hon. W. E. Gladstone,.. On the doctrine of "religious liberty" ...to the bishop of Aberdeen and Primus. Oxford, 1852. (Disbound)	1852	1
25	590	Yates, James, 1789-1871	Memorials of Dr. Priestley. From the Christian reformer, A.D. 1860, with numerous corrections and additions. (Disbound) 2冊あり。	1860 ?	1
26	151		Vie politique, litteraire et privée de Charles James Fox, membre du parlement d'Angleterre et secrétaire d'état, etc. / ouvrage traduit de l'anglais sur la quatrième édition originale, par J. Martinet.	1807	2

27	83		Projet de loi sur la procédure civile pour le canton de Genève : présenté par le Conseil d'Etat au Conseil représentatif.	1818	1
28	317		Radical resolutions : adopted at a numerous meeting of patriotic nightmen, to take into consideration the late transactions at Manchester : and the practicability of kicking-up a row thereat : most respectfully dedicated to all radicals.	1819	1
29	595		An Act to amend the representation of the people in Scotland	1832	1
30	597		Cour des pairs : procès de la conspiration du 19 août : audience de 9 mai.	1821 ?	1

〈参考文献〉

Encyclopaedia Britannica Online (London: Encyclopaedia Britannica, 2008). [<http://www.britannica.co.uk>]
Oxford Dictionary of National Biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000, ed. by H.C.G. Matthew and Brian Harrison (Oxford: Oxford University Press, 2004). [<http://www.oxforddnb.com>]

伊東俊太郎他編『科学史技術史事典』（弘文堂，1983年）。

経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善，2000年）。

日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想辞典』（研究社，2007年）。

松村赳、富田虎男編著『英米史辞典』（研究社，2000年）。

※このカタログのうちとくに人名紹介部分は、その多くをこれら事典／辞典に依拠している。

実行委員

伊藤 義人 (委員長) 増田 晃一
長尾 伸一 渡邊 俊彦
斎藤 夏来 蒲生 英博
三根 慎二 伊藤 哲谷
川瀬 正幸 次良丸 章
井上 修 山田 朋子

調査協力

田中 啓太
安井 啓介

名古屋大学附属図書館 2008年秋季特別展

西洋近代思想と永井文庫－最大多数の最大幸福を求めて－

会期：2008年10月6日(月)～10月27日(月)

会場：名古屋大学中央図書館4階展示室

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

共催：名古屋大学経済学研究科

後援：社会思想史学会 日本18世紀学会 日本イギリス哲学会
愛知県 岐阜県 三重県 名古屋市の各教育委員会

特別展講演会

日時：10月18日(土) 14:00～17:00

会場：中央図書館5階多目的室

講師：土方直史 (中央大学名誉教授) 「ベンサムからオ
ウエンへー功利主義・民主主義・協同主義ー」

柳田芳伸 (長崎県立大学教授) 「永井文庫の特
徴とその学術的意義」

永井義雄 (名古屋大学名誉教授) 「本を通して出
会った人たち」

コメンテーター：深貝保則 (横浜国立大学教授)

執筆分担

深貝保則 解説 資料説明
川名雄一郎 解説 資料説明
松波京子 解説 資料説明
長尾伸一 資料説明
西本和見 資料説明